

やっかいな樂園

第一話	第二話	第三話	第四話
「いきいき」	「おろおろ」	「あらあら」	「すくすく」
松平さん(夫)	松田		年少1
山本さん	山本		年少2
先生	岩下		年中1
鈴木さん(夫)	林		年中2
村野さん	野坂		年中3
島崎さん	島		年長1
芥川さん	安川		年長2
瀬戸内さん	内藤		年長3
先生の奥さん		金田	年少3
伊沢さん		沢木	年中4
片岡さん		岡野	年中5
松平さん(妻)		松平	年中6
進藤さん		安藤	年長4
原田さん		リサ	年長5
鈴木さん(妻)		森	年長6
阿部さん		芥川	年長7

男性八人、女性八人による四話オムニバス。

それぞれが右の縦に結ばれる一人三役(老人・成人・赤ん坊)を演じる。

劇中音楽…交響曲第九番・第四楽章(讚美歌一五八番)

1 いきいき 一つ目の部屋「待合室」

暗闇。

救急車のサイレンと同時に一瞬にして明るくなったそこは、町の小さな整骨院の待合室。

芥川さん、山本さん、阿部さん、伊沢さん、片岡さん、進藤さんが、押し合
いへし合い外の様子を覗いている。

遠ざかるサイレントともに救急車の走り去る音。

芥川さん ……行っちゃったよ。

だんご状になっていた老人たち、のろのろとそれぞれ椅子に腰かける。

進藤さん いや驚いた。急にだもの。

片岡さん 先生、すごい声出してたねえ。いたたたたあつて。

山本さん ありや盲腸だな。

伊沢さん あの年じゃ盲腸だってしおれちやつてるよ。

阿部さん 腸捻転かもしれませんよ？

伊沢さん そんな上等な病気じゃないね。

進藤さん 悪いものでも食べたんだよ。

芥川さん 気の毒になあ。

伊沢さん 気の毒なのはあたしたちだよ。身体からだが悪いのはこっちなんだからね。

片岡さん 伊沢さん、膝の具合どうなの？

伊沢さん まったく変わりばえしないね。

進藤さん あたしも腰の方は相変わらさずだけどき、青汁飲むようになってから調子
がいいよ。

山本さん まずいんだらう？

進藤さん おいしくないわよ。でも血圧下がったんだから。

片岡さん 体に良くておいしいものってないのかねえ。

芥川さん ワインがいらしいな。

伊沢さん 芥川さん、糖尿だろ？

山本さん 呑むことしか頭にないんだからなあ。

進藤さん 青汁だよ、青汁。だまされたと思って飲んでごらんよ。

伊沢さん 好きだよね、進藤さんも。こないだまできな粉がいろいろって騒いでなかった？

進藤さん むせるんだよ、きな粉は。やっぱり青汁だね。

片岡さん でもまづいんじゃあねえ。

進藤さん 牛乳で割ると飲みやすくなるよ。

阿部さん それより、どうします？

伊沢さん どうって？

阿部さん 先生、いなくなっちゃって。

芥川さん そうですよねえ。どうしましょうか。

伊沢さん どうしようもないじゃないよ。奥さんまでついてっちゃったんだから。

芥川さん リウマチ、痛むんですか？ 阿部さん。

阿部さん いえ、それほどでもないですけど。

山本さん このまま空っぽにしてくのも不用心だしなあ。

進藤さん いいじゃないの。あたしたちで留守番しててやれば。

片岡さん そういうことならお茶でも沸かそうかねえ。あたし、おせんべい持っているから。(お湯を沸かしに行く)

阿部さん でも、そんなこと勝手に……。

伊沢さん 勝手に菓のもうってんじゃないんだから。

進藤さん お茶ぐらい飲んだってバチはあたららないよ。

芥川さん 奥さんの雷が落ちないかね。

伊沢さん どうしてさ。留守番してやるんだよ？

元気はつらつと原田さん登場。

原田さん (大きな声で) はい！ おはようさん！

進藤さん あら、原田さん。

山本さん また来たのかい。

原田さん (豪快に笑いながら) 冷たいこと言わないでよ。山本さん！

山本さん だって来るたんびに怒られてるじゃないか。

原田さん (ドスンと腰をおろし) まったくこっちはお客さんだつてのにねえ。

芥川さん どこも悪いところがないんじゃないだろうか。

原田さん これだけ通つて^{かよ}るんだから、先生も病名のひとつくらいつけてくれりや

いいのにさ。

伊沢さん 病名つけるだけで治しちやくれないうよ。

片岡さん (菓子入れを手に戻って来て) ゆべしがあつたわよ。

阿部さん ああ、また勝手に……。

進藤さん 鼻がきくねえ、片岡さんは。

片岡さん あら、原田さん。ほら、ゆべし。

原田さん いい時に来ちゃったね。(食べる)

芥川さん そんなに元気なら旅行にでも行ったらどうだい。

進藤さん 南の島とかいいじゃない。

阿部さん 外国は生水が怖いんでしよう？

原田さん あたしは今までおなかこわしたことなくってないんだ。でも旅行なんか行
つたつて楽しかないもの。ここのがいいよ。

山本さん 病院の世話になんかならないに越したことはないのになあ。

原田さん 本人が痛いって言うんだから痛いんだよ。(喉につまらせ) お茶はない

の？

進藤さん 今、お湯沸かしてるよ。

片岡さん ……あら……お湯、沸かしたつけ……？

伊沢さん いやだよ、ボケちゃったんじゃないの？ 山本さん、ちよつと見てきて
やっつてよ。

山本さん 仕様がねえなあ。(見に行く)

阿部さん 先生がお留守だからってあんまり……。

原田さん あら。先生いないの？

進藤さん 大変だったのよ！

伊沢さん 救急車呼んでさ。

片岡さん いたたたたあってね。

芥川さん 叫ぶわ転げまわるわ。

阿部さん 奥様も大慌て。

進藤さん 古くなつたゆべしを食べたとかなんとかで。

伊沢さん 拾い食いつて言わなかった？

芥川さん とにかく二人で病院だ。

原田さん 医者の不養生ってほんとなんだねえ。

山本さん (戻って来て) 火、ついてなかったよ。

片岡さん あら、どうもお世話様。

進藤さん ちよつと片岡さん、しっかりしてよ。

片岡さん ゆべしに気をとられちゃったもんだからね。

芥川さん 阿部さんもゆべし、いかがですか？

阿部さん ……これじゃないんですか？ 古くなつたゆべしって。

山本さん 大丈夫。原田さん食べてるから。

阿部さん でも原田さん、一度もおなかをこわしたことはないって……。

原田さん (立ち上がり) 先生いないんだったらさ！

原田さん、ほとんどスキップしながらそれはうれしそうに患部を温める器械を引っ張ってくる。

原田さん 一度これをあててもらいたくてねえ。(スイッチを入れ、膝に当てる)

山本さん 痛むのは背中じゃないのかい？

原田さん どこだっていいんだよ。

片岡さん 原田さん、普段、器械には近寄らせてもらえないからねえ。

原田さん (うっとり) あらあ、あつたかいんだねえ。

伊沢さん あたしもやろう、(低周波の治療器具を持ってくる)

進藤さん 先生、いつ戻ってくるかわからないしね。

山本さん おいおい、いいのかい？

伊沢さん どうせすることは一緒なんだ。

進藤さん どっかに新しいコルセットない？

片岡さん 肩が痛いのはなにがいいかねえ。

芥川さん 知らないぞ。ねえ？ 阿部さ……ん。

芥川さん、同意を求めようと阿部さんを振り返ると、阿部さんはすでに黙々と手首に薬を塗りつけている。

芥川さん ……阿部さん？

阿部さん 私、いつもこのお薬なんです。

芥川さん あ、そうですか……。じゃあ私、塗りましょうか？

進藤さん ちょっと芥川さん！ 交代でやってあげるから背中押してよ！

芥川さん 山さんやってやれよ。

山本さん (いつの間にか片岡さんの肩を揉みながら) もうやらされてるよ。

進藤さん ほら早く！

芥川さん、渋々進藤さんのマッサージを始める。

全員、思い思いに治療中。

進藤さん 結構上手じゃないの。

芥川さん 冗談じゃないよ。あたしだって患者なんだよ？

伊沢さん 当たり前だろ。だからみんなここにいるんじゃないか。

片岡さん 原田さん以外はね。

進藤さん この年になればどっかしらガタはくるよ。

山本さん あくせく働いてやっと自由に使える時間ができたっていうのになあ。

伊沢さん 今度はその時間を自由に使えない体になってるんだからね。皮肉なものだよ。

片岡さん 原田さん以外はね。

原田さん 死ぬ瞬間まで元気であるのが親の義務ってもんでしょ。寝たきりなんかになってごらんよ。あたしなんて元気な今でさえ、ここの先生に嫌がられてんのにさ。

阿部さん 来るところを間違えてるからですよ……。

伊沢さん でも元気にしてたらしてたでさ、この間も孫たちと徹夜で麻雀したら家族に怒られてね。

芥川さん その様子じゃ、さぞお嫁さんを泣かしてるんだろう。

伊沢さん いいんだよ、雅子さんのことなんて。

片岡さん 年とつてよかったことってなんだろうねえ。

進藤さん あたしはホラふくのが楽しいね。

山本さん なんだ、ホラなんてふいてんのかい？

進藤さん だって昔のことならどんなデタラメ言ったって、若い人たちにはわかりっこないんだからね。

伊沢さん そりゃそうだ。

進藤さん これでも昔は「浅草小町」って呼ばれてね、とかさ。

片岡さん 進藤さん、浅草にいたの？

伊沢さん だからホラだよ、ホラ。

進藤さん 本物のお侍さんを見たことがあるとかさ。

阿部さん ずいぶん大胆なホラをふいてるんですね……。

進藤さん おやつには障子紙を食べたもんだとか。

山本さん そこまでいくとボケたと思われなにかい？

進藤さん でも孫は信じたよ。

原田さん あたしも今度やろう。

芥川さん みんな人が悪いねえ。

そこへ、紙袋を手に瀬戸内さんが足を引きずりながら現れる。

瀬戸内さん ついに完成したよ、先生！

山本さん お、博士のお出ました。

芥川さん うまいこといったのかい瀬戸内さん。なんだっけ、この間の……

瀬戸内さん 「折りたたみ式松葉杖」な。あれはやめたよ、場所をとらない画期的な発明だったんだが。

伊沢さん 試してる最中に転んだんだろ？

瀬戸内さん 使用中に折りたたまれてしまったな。

片岡さん それで怪我の具合はどうなの？

瀬戸内さん なんとか杖なしで歩けるようになった。それより今度は傑作なんだ。

(紙袋から奇妙なスリッパを取り出し) ジャジャーン！

阿部さん なんです？

瀬戸内さん 名付けて「お掃除らくらくスリッパ」！

女性陣の間にやや白けた空気が流れる。

芥川さん (手に取り) ほほう、スリッパの裏がモップになってる。

山本さん これを履いて歩けば床がきれいになるって寸法か。

瀬戸内さん そのとおり！ 先生の奥さん、腰が悪いだろう。これで病院の掃除も

楽々スイスイだよ。(スリッパを履いて歩きまわる)

進藤さん ……水をさすようで悪いけどね、瀬戸内さん。

瀬戸内さん ほら、こんなにピカピカだよ。久々の大発明だ。

片岡さん 言いにくいねえ、あんなに喜んでるよ。

阿部さん 黙ってましようか？

瀬戸内さん 欲しければいくらでも作ってやるよ。

伊沢さん そんなものどっくに売ってるんだよ。

瀬戸内さん なんだって！（ショックで転ぶ）

芥川さん 大丈夫かい！

阿部さん やっぱ黙ってた方が……。

進藤さん あたしもひとつ持つてるよ。滑って危ないからすぐ使わなくなっちゃったけどさ。

山本さん 確かに滑って危ないなあ。

片岡さん 怪我しなかった？

瀬戸内さん ひねった足がまた……。

進藤さん どうしても転ぶんだね。瀬戸内さんの発明は。

原田さん （自分が使っていた器械を引っ張って来て）ほら、これ使って。

伊沢さん 馬鹿だね、こういう時は冷やすんだよ。

片岡さん 原田さん、怪我したことないからねえ。

芥川さん 湿布だ、湿布。

進藤さん （辺りをかき回し）この辺じゃないの？

原田さん あったよ、湿布！

阿部さん それ、温湿布ですよ。

伊沢さん ほんとに好きだね、あつためるのが。

芥川さん あつたあつた。

山本さん 包帯もいるよなあ。

みんなが瀬戸内さんの治療に当たっていると、

「おい、松っちゃん、まっすぐ持てよ」

「島やんこそしつかり持てよ」

「さつき動いたとこ、アタリだからな」

などと言いながら、島崎さんと松平さんが、対局中の碁盤を一人で運びながらソロソロと現れる。

松平さん なんだった？ さっきの救急車。

島崎さん 病人か？ 怪我人か？

伊沢さん 今いるのは怪我人だよ。

進藤さん 運ばれてったのは病人だけどね。

山本さん 先生が腹いたでね。

片岡さん いたたたたあつて。

島崎さん なんだ、腹いたかよ。

松平さん あわてて来たのになあ？

伊沢さん それにしちゃ遅かったね。

芥川さん 松平さんち、目と鼻の先じゃないか。

松平さん 碁の途中だったからよ。

島崎さん 松っちゃん、アタリだぞ、さっきのとき。

松平さん わかってるよ。ここだろ？

島崎さん それじゃ俺のところが死んじまうじゃねえか。

山本さん (のぞき込み) 島崎さんが優勢か。

松平さん まだまだこれからだよ。(局面を直し、打ち始める)

進藤さん (瀬戸内さんに包帯を巻き終え) これで先生の帰りを待つんだね。

瀬戸内さん いや、かたじけない。(芥川さんに起こしてもらい、松平さんたちの方

く)

島崎さん また発明失敗かい？

瀬戸内さん 今いいこと思いついたよ。碁盤と碁石にマジックテープをつけるって

のはどうだね。逆さにしたって石は動かないぞ。

松平さん そいつは便利だな。

芥川さん 途中で持ち運べるしな。

山本さん バリバリいってうるさかないか？

島崎さん 碁^{ごけ}笥の中でくっついてかなわないだろう。

瀬戸内さん うーん。だめか……。

おじいさんたちが碁の観戦をしている間、おばあさんたちは包帯などを片づけていたが、阿部さんの様子がおかしい。

進藤さん どうしたのよ阿部さん。モジモジして。

伊沢さん お手洗い？

阿部さん 違います……。

原田さん (例の器械を指し) 寒いんならこれであったまったら？

片岡さん 阿部さんは島崎さんにほの字なんだよねえ。

進藤さん あらやだ！ そうなの？

阿部さん 声が大きいです、声が。

伊沢さん 早く言つてよ！

原田さん 島崎さんて奥さんいないの？

進藤さん 亡くなったよ、五年前に。

伊沢さん なんだ、そうかい。そうだよねえ。阿部さんだって、ダンナに先立たれてもう十年だもんねえ。

片岡さん いい人だったよねえ。

進藤さん そう言う人に限つてねえ。

伊沢さん うちの宿六なんて殺しても死にそうにないよ。

片岡さん 伊沢さんのご主人、ちよつと原田さんに似てるよね。

伊沢さん 聞いてよ、こないだもさあ……。

話に熱中するおばあさんたち。

松平さん あいたー、そうきたか。

芥川さん やられたね、松平さん。

瀬戸内さん 相手の急所はわが急所だな。

島崎さん で？ 芥川のダンナはどこが悪くて通かよつてんだ？

芥川さん いや、ちよつと腰がね。

山本さん 本当は阿部さんに会うのが楽しみなんだよ。

島崎さん なんだ、女目当てかよ。

芥川さん だって、いいだろ？ 阿部さん。

島崎さん ちよつと暗くねえか？

松平さん お上品なんだよ。

山本さん そうそう。うちのババアとは大違いだ。

芥川さん 優しいしな。

瀬戸内さん 私の発明した「完璧日除け傘」を使ってくれたのも阿部さんだけだった。
た。

島崎さん 傘にぐるりと暖簾のれんがぶらさがってるアレか。

瀬戸内さん 前が見えなくて転んだそうだ。悪いことをした。

山本さん おまけに、あんなきれいな歯して入れ歯じゃないらしいよ。

松平さん 芥川さんとおのお嫁さんにちよつと似てるよな。

芥川さん 倅せがれとは趣味が似てるんだ。

島崎さん 親父の果たせなかつた夢が息子の代で叶ったってわけだ。

山本さん いい話だねえ。

伊沢さん (ハツとして) ちよつと。今は原田さんの健康自慢なんてどうでもいいんだよ。

進藤さん そうだよ。阿部さん、チャンスじゃないのよ。

阿部さん チャンスってそんな……。別に私……。

伊沢さん じれつたいねえ！

片岡さん お茶を持っていきなさいよ。あたし、おせんべい持ってるから。

原田さん そう言えば、お茶はどうしたのよ。

なにやらモクモクと煙が立ち込める。

瀬戸内さん なんだなんだ！

島崎さん おい、なんか燃えてるぞ！

片岡さん ああ、お湯沸かしてたんだよねえ。

伊沢さん なにのんきなこと言ってるんだよ！

進藤さん 山本さん！

山本さん もとはと言えば片岡さんが……。

原田さん お茶飲めないじゃない。

阿部さん お茶どころじゃありませんよ！

松平さん 誰か一一九番！

芥川さん 一一九番て何番だ？

進藤さん 一〇四で訊くんだよ！

山本さん 一一九番ならさっきかけたろ？

片岡さん でも来たのは救急車だったよね。

島崎さん 火事の時だって一一九番だよ！

芥川さん 続けて呼ぶのは気がひけるな。

伊沢さん 事件なんだから一一〇番でいいよ！

瀬戸内さん 誰か放火したのか？

阿部さん 火をつけたのは山本さんです。

山本さん そりゃないよ、阿部さん！

原田さん 山本さん、逮捕されちゃうんだね。

パニック状態のところへ「火事か？ 火事か？」という叫び声とともに、隣の家の鈴木夫妻がいくつものバケツを持って駆けつける。

松平さん ああ！ 鈴木さん！

片岡さん もうお隣まで燃え広がったの？

鈴木さん(妻) 煙が見えたから飛んで来たのよ！

鈴木さん(夫) みんな！ あわてるな！

鈴木さん(妻) さあ！ これに水を汲んで来て！

進藤さん 準備がいいねえ。

山本さんと松平さん、水を汲みにいく。

鈴木さん(夫) これよりバケツリレーを行う！ 速すみやかに一列に並んで！

精力的に動く島崎さんにさりげなくついてまわっていた阿部さん、しっかり島崎さんの隣をキープ。

そんな阿部さんにやはりついてまわっていた芥川さんも、ちゃっかり阿部さんの隣をキープ。

鈴木さん(夫) を先頭に全員一列に並ぶ。鈴木さん(妻) は列の乱れを確認。山本さんと松平さん、バケツを持って戻ってくる。

バケツリレー開始。

鈴木さん(妻) どんどんまわして！

芥川さん 阿部さん、手が痛いでしょう。軽くしましょうね。(と、バケツの水を

こぼす)

阿部さん でも、そんなことしたら……。

鈴木さん(夫) なにやってる！ そこ！

島崎さん (阿部さんに) 痛いならあっちで休んでろ。

ポーっとなる阿部さん。軽くショックを受ける芥川さん。

それを聞いた伊沢さん、進藤さん、片岡さん、ワッと集まり

進藤さん 「休んでろ」だって！

片岡さん イカすねえ！

伊沢さん 脈だよ、脈があるんだよ！

鈴木さん(妻) 列を乱さない！

鈴木さん(夫) 手を休めるな！

バケツリレー再開。

松平さん (バケツを渡しながら) 張り切ってるなあ、鈴木さん。

山本さん 普段はぼんやりしてるのに。

瀬戸内さん なにか葉でものんでるんだらうか。

鈴木さん(夫) 私語を慎め！

鈴木さん(妻) (せわしなくみんなの動きを確認しながら) リズムが悪い！ さあ、

歌に合わせて！(と力強く「第九」を歌い始める)

伊沢さん こういう時、歌うかい？

片岡さん 鈴木さんの奥さん、最近コーラス始めたのよ。

鈴木さん(妻) 一緒に！

朗々と歌いながら、指揮者のようにみんなを仕切る鈴木さん(妻)に合わせて、
みんなモゴモゴと適当に「第九」を口ずさむ。

鈴木さん(夫) よーし！ 消火作業終わり！

片岡さん ちょっと面白かったねえ。

松平さん 歌も意外によかったよ。

鈴木さん(妻) でしょ？ さすがベートーベンよ！

芥川さん 大丈夫ですか？ 阿部さん。

阿部さん (気づかず島崎さんに) ありがとうございます。

島崎さん なにがだい？

瀬戸内さん これからは防火用品の発明に力を注ぐべきだな。

伊沢さん 転んで逃げ遅れるようなものならやめとくれよ。

山本さん あれ、鈴木さん寝ちゃってるよ。

鈴木さん(妻) ちょっとあんた！ 濡れたまんま寝たら風邪ひくよ！

鈴木さん(夫) (目を覚まし) ん? ああ……。

松平さん いつもの鈴木さんに戻ったよ。

原田さん ひと仕事したらおなかへっちゃったね。

伊沢さん あたしさ、あれ食べてみたいんだよ。あの丸いの。こんな大きくてさ、
なんだっけ?

進藤さん ピザじゃないの?

伊沢さん それそれ!

瀬戸内さん 私もぜひ食べてみたい。後学のために。

松平さん 電話で届けてくれるよな。

阿部さん 確か、村野さんのお宅がピザ屋さんになったんじゃないやありません?

島崎さん 蕎麦屋たたんじまったのかい?

片岡さん 今はピザ打ってるらしいわよ。

芥川さん ひとつ頼んでみるか。

伊沢さん 番号は?

鈴木さん(妻) この間うちの人、頼んだわよ。ちよつと、お父さん! 村野さんと

こ何番?

鈴木さん(夫) (寝ぼけて) ん? ああ、村野庵か?

鈴木さん(妻) ピザだよ、ピザ!

鈴木さん(夫) うむ……。 (うとうと)

瀬戸内さん 燃料切れか?

片岡さん そうだ。(手提げ袋から包みを取り出し) おせんべいくるんできたのがピ
ザ屋さんのチラシだった。

松平さん 貸してみな。(チラシを受け取り、電話をかける) あーもしもし? そう

そう注文ね。電話? えー、うちの電話は……

伊沢さん 馬鹿だね、ここの電話だよ!

松平さん 知らないよ、ここの番号なんて。

芥川さん 診察券に書いてあるだろう?

片岡さん (診察券を見て) これだ。

山本さん 何番だい？

片岡さん 小さくて読めないねえ。

進藤さん 瀬戸内さん、虫メガネ持ってないの？

瀬戸内さん 持ってないよ。

原田さん ダメだねえ、発明家のくせに。

瀬戸内さん 虫メガネ持つてるのは探偵だろう。

松平さん (電話口で) ちょっと待った。(ふさいで) 誰か代わってくれよ。

伊沢さん もういいよ、誰のこの番号だって。

進藤さん (受話器を奪い) あのね、三丁目の、木下整骨医院。わかる？

鈴木さん(妻) (受話器を奪い) うちの隣よ！ この間注文した鈴木！ うち？ だ

からうちは木下整骨医院のお隣！

阿部さん 住所をおっしゃらないと……。

鈴木さん(妻) 三丁目六番地！ その隣だから三丁目五番地！

松平さん 七番地じゃなかったかい？

伊沢さん (受話器を奪い) 三丁目七番地の木下整骨医院！ え？ ピザの種類？

山本さん 選ぶんだな、こん中から。

原田さん 「ハワイアン」てのがいいよ。

進藤さん これ、パイナップルじゃないの？ イヤだよ、そんなの。

松平さん 「ダイエット」なんてのがあるんだな。

片岡さん 「スペシャル」がいいんじゃないかねえ。

伊沢さん ちょっと、早くしとくれよ！

島崎さん 普通のでいいよ、普通ので！

阿部さん (電話に出て) 普通のをお願いします。……あら……。 (振り返り) 普通

なんてないそうです。

芥川さん 英語で言わなきゃいけないんじゃないですか？

瀬戸内さん 普通は「ノーマル」だが。

芥川さん (電話に出て) 「ノーマル」をお願いします。……は？ (振り返り) 「プ

レーン」て言うらしいよ。

瀬戸内さん そんなはずはない。「普通」は英語で「ノーマル」だ。

伊沢さん あつちが「プレーン」て言うんならそうなんだよ!

鈴木さん(妻) (夫を揺さぶり) ねえ! うちが頼んだのなんだった?

鈴木さん(夫) 蕎麦だよ、蕎麦……。 (寝る)

鈴木さん(妻) ピザの話だよ!

芥川さん (電話に) はい? トッピング?

進藤さん のせることだよ、エビとかいろいろさ。

芥川さん (気分が悪くなり) 横文字はわからんよ……。

進藤さん (電話に出て) そうよね? エビとかのせるんでしょ?

伊沢さん 勝手に決めないでよ、進藤さん!

原田さん あたし、とろろこんぶ。

松平さん ないだろう、とろろこんぶは。

片岡さん (電話に出て) あのね、決まらないのよ。やっぱり「スペシヤル」がお

薦めなんでしょ?

伊沢さん 勝手に決めないでっば!

阿部さん なんだか私、動悸がしてきて……。

芥川さん あたしでもありますよ。こっちで休んでみましょう。

瀬戸内さん やはりどうしても納得がいかん。(電話に出て) 君ね、英語で「普通」

は「ノーマル」だろう?

山本さん よせよ瀬戸内さん。(電話に出て) え?(振り返り) 生地のタイプを選べ
つてさ。

島崎さん (受話器を奪って叩きつけ) そんな七面倒くせえものやめちまえ!

松平さん 電話にあたるなよ、島やん。

鈴木さん(妻) (受話器を拾い) もしもし? まだもめてるのよ。あたし歌うから、

それでも聴いて待ってて。(歌い出す)

阿部さん かえってご迷惑じゃあ……。

村野さん (ピザの箱を持って現れ) はいよ、おまちどうさん。

進藤さん あら、村野さん!

伊沢さん 今、お宅に電話してたところなんだよ。

村野さん だから持って来てやったよ。ほら。

瀬戸内さん あの注文でよくわかったなあ。

村野さん 整骨医院とか騒いでたのを横で聞いててピンときてね。

山本さん 早かったねえ。

村野さん 自転車ならものの三分だ。

片岡さん それにしても早いねえ。だってまだ電話切つてないよ？

村野さん (電話の方に向かいながら) 出来あがつてたのを持って来たからよ。

原田さん でかしたよ、村野さん！

芥川さん よそ様の分じゃないのかい？

村野さん (鈴木さん(妻)から受話器を奪いとり) おう、俺だ。ああ、持って来た

よ。……あ？ そんなこたあ知らねえよ。とつとと届けねえ方が悪いんだろ？

阿部さん やっぱり他の方のピザなんですね……。

村野さん いいんだよ！ ピザも蕎麦も出来たて食わなきゃ意味ねえんだから。文

句言つてねえで足りなくなった分、作りやがれ！（切る）

島崎さん (村野さんの肩を叩き) 蕎麦屋やめても職人^{かたぎ}気質は変わらないな。

村野さん おうよ。さあ、早く食ってくれ。

伊沢さん いいかい？ 開けるよ？

伊沢さんのまわりを全員がぐるりと取り囲む。

ピザの箱を開ける伊沢さん。軽いどよめき。

山本さん こりやまたでっかいね。

原田さん (鼻の穴をふくらませて) んゝ。いい匂いだ。

島崎さん どうやって食うんだよ。

阿部さん 切り分けましょうか？

村野さん 切れ目が入ってんだろ。

進藤さん 気が利いてるねえ。

瀬戸内さん でも八等分だな。

松平さん 何人いるんだ？

片岡さん 大勢だよねえ。

鈴木さん(妻) あたしたちはいいわよ。お昼の支度をしてたところだから。

伊沢さん お昼、なんなの？

鈴木さん(妻) めざしをね……(ハッとして夫を揺さぶり)お父さん！ 台所の火、止めてきた？

鈴木さん(夫) (ガバッと起き上がり) 台所の火？

鈴木さん(妻) たいへん！ 黒焦げになっちゃうよ！ (飛び出していく)

鈴木さん(夫) (別人のようにすばやくバケツを集め) あわてるな！ 濡れたふきを掛けてるんだぞ！ (と後を追う)

島崎さん つくづく火事が好きなんだな。

阿部さん いきいきなさってますよね。

山本さん (人数を数えていた) 鈴木さんたちが減って、十一人か。

村野さん 俺を勘定に入れるなよ？

山本さん ああ、入れてたよ。

進藤さん ちょうど十人だね。

原田さん 見てよ、このチーズ。すごく伸びるよ。

伊沢さん ちょっと原田さん、これから平等に分けるんだからさ。

片岡さん どっかに包丁あるかねえ。

村野さん (ポケットに手を入れ) おお、それなら……

瀬戸内さん ピザを切り分ける素晴らしい道具を思いついたぞ！

芥川さん どんない？

瀬戸内さん 歯車のようなものを回転させて、それに握りをつけてだな……こうしちゃおれん、早速試作だ！ (足を引きずりながら飛び出していく)

進藤さん 転びなさんなよ！

村野さん (ポケットからピザ・カッターを取り出し) コイツのことか？

山本さん ああ……瀬戸内さん……。

片岡さん 八人になったね。

伊沢さん 九人だよ。大丈夫かい、片岡さん。

村野さん さっさと食ってくれ。固くなっちまうぞ。おっとその前にお代をいただくか。三千円チョッキリにまけとくよ。

原田さん 二千七百円にしてよ。一人三百円でキリがいいじゃない。

村野さん 勝手なこと言うなよ。

阿部さん 半端な分は私が……。

芥川さん いいですよ、阿部さん、あたしが払いますから。

進藤さん あら、芥川さんのおごり？

芥川さん え？

伊沢さん 悪いわね！

阿部さん よろしいんですか？

芥川さん え……ええ、もちろん……。

山本さん あーあ……。

村野さん 太っ腹だな、ダンナ！

原田さん ごちそうさま！

芥川さん、島崎さんと松平さんにさりげなく援助を求める視線を送るが、二人はいつの間にか碁を再開している。

芥川さん (村野さんに) 三千円ね……。

村野さん はい毎度！ 今後ともどうぞご贖目に。(外に出ながら) サラミに気をつける。噛み切れねえかもしれねえぞ。(外から声だけ) おっと、パラパラ降ってきやがったな。

伊沢さん イヤだよ！ 雨？

進藤さん たいへん！ 洗濯物！

芥川さん うちもだ！

山本さん お嫁さんはどうした。

芥川さん 料理教室だよ。「洗濯物よろしく、お義父さま」って頼まれてるんだ。
島崎さん あんまり甘やかすとロクなことねえぞ？

進藤さん あたしタツパー持つてるから、ひと切れもらってくよ。伊沢さんは？

伊沢さん ビニール袋があるからさ。(芥川さんに) ほら、一枚やるよ。

芥川さん すまないね。

進藤さん (身支度を終え) 急げや急げ、と。(阿部さんに耳打ちで) しっかりおやりよ。

阿部さん しっかりってそんな……。

片岡さん あたしがついてるからね。おせんべいもあるし。

伊沢さん 心配だねえ、洗濯なんかしなきゃよかったよ。

進藤さん (みんなに) それじゃお先に！

伊沢さん あとは頼んだよ！

芥川さん 悪いな山さん。また明日！

進藤さん、伊沢さん、芥川さん、あわただしく帰っていく。

原田さん あら。ピザ五つしか残ってないよ。

島崎さん 俺はいらねえよ。

阿部さん 召し上がってください。私、結構ですから。

松平さん いいですよ。島やん、俺と半分つな。

島崎さん いらねえって。

山本さん まあそう言うなよ、島崎さん。

原田さん あたしはいただくよ。

片岡さん 冷めちゃうからねえ。

松平さん(妻) (四本の傘を手に持って現れ) なんだかずいぶん散らかってなあい？

片岡さん あら、松平さん。こんにちは。

松平さん(妻) あら、おそろいで。なんだったの？ 救急車。

山本さん 先生が腹いたでね。

松平さん(妻) (夫に) いやだ、なにやってんのよ。

松平さん もうちよつとで終わるよ。

松平さん(妻) みつちゃんのこと公園まで迎えに行つてよ。

阿部さん お孫さん、大きくなられたでしょう？

松平さん(妻) 来年、小学校なんですよ。今ちよつと肥満気味でね。

松平さん おまえが行つてやればいいだろ。

松平さん(妻) あたしはお昼の支度があるもの。島崎さんも食べてくでしょ？

島崎さん すいませんね、いつも。

片岡さん よかったねえ。ピザ、ひとつ余るよ。

松平さん(妻) 雨がひどくならないうちに早く！(と、盤上の碁石を集める)

島崎さん ああ！

松平さん なんてことするんだよ！

松平さん(妻) (さつさと片づけながら) まったくいい年して遊んでばかり。

松平さん おまえ、石を交ぜるなよ！

松平さん(妻) 文句があるなら自分でやってちょうだい。

島崎さん (腰を上げ) 打ち直しか……。松っちゃん、命拾いしたな。

松平さん (腰を上げ) よし、メシ食つてからな。

松平さん(妻) (二人を急かし) ほら、行くわよ！ それじゃどうもお騒がせしま

した。(去り際に) 山本さん、『水戸黄門』始まつてるわよ。いいの？

山本さん (時計を見て) いけねえ！

片岡さん (あわてて身支度を始め) お銀、もうお風呂入っちゃったかねえ？

山本さん 片岡さんもお銀かい？

片岡さん あたしは弥七。

阿部さん ……みなさん、ピザは……。

山本さん ああ、そうか。

原田さん 残してつてもいいよ。

山本さん せっかくだからもらつてくよ。(ひと切れ手に取る)

片岡さん 原田さん、食べ過ぎるからね。(ひと切れ紙に包む)

山本さん それじゃ阿部さん、また明日。(退場)

片岡さん 先生帰ってきたらよろしくね。(退場)

阿部さん あの……。

阿部さんが二人を見送ったところへ、島崎さんが戻ってくる。

島崎さん 煙草忘れちゃったよ。

阿部さん (すばやく見つけ) これですね？

島崎さん ああ、どうも。

阿部さん 島崎さん、お上手なんですね、碁目並べが。

島崎さん は？

阿部さん 私も始めようかしら。(無言ながらも激しくけしかける原田さんを横目に)

……あの……今度、教えていただけませんか？ 碁目並べ。

島崎さん 五目並べ……？ まあ……暇な時にでも来たらいいや。

阿部さん よろしいんですか？ お宅に伺っても。

島崎さん かまわないよ。汚ねえところだけど。

阿部さん (バッグから急いで紙とペンを出し) そうしたら、お電話番号を……。

島崎さん、番号をメモする。

原田さん、雄たけびをあげたいところを抑えながら、激しくガッツポーズ。

島崎さん 留守の時は、たいてい松っちゃんのところだ。

阿部さん ありがとうございます。楽しみです。

島崎さん、退場。

夢を見ているようにぼーっとする阿部さん。

原田さん (そんな阿部さんにタックルしながら) やるじゃないよ！

阿部さん やっちゃいました……。

原田さん 今度なんて言わず、午後にも押しかけちゃいな！

阿部さん 私、本屋さんに行って碁目並べのこと予習してきます。

原田さん 五目並べじゃなくて、囲碁の本を探すんだよ？

阿部さん すみません、あとをよろしく。

原田さん はい、お疲れさん。また明日ね。

阿部さん、退場。

原田さんが一人、ピザを食べながら心ゆくまであちこち器械で温めているところへ、言い争いながら先生と奥さんが帰ってくる。

奥さん まったく冗談じゃありませんよ。恥ずかしいったらありやしない。大体、

朝からあんな大きいピザなんか食べるから。

先生 せつかく村野さんがくれたんだぞ。もつたいないじゃないか。

奥さん 冷凍にでもすればいいじゃないの。三切れも食べることもなかったのよ。

先生 そんなこと言ったらもう食べちゃったし、救急車にも乗っちゃったんだ。

今さらしようがないだろう。おまえこそなんだ。患者さんほっぼらかして。

奥さん 食べ過ぎってわかってたら、ついていたりしませんでしたよ。(床を見て)

あら、どうしてこんなに濡れてるのかしら。

原田さん おかえんなさい。

先生 (気づいて) 来なくていいって言ってるでしょう、原田さん！ あ！ ダメ

だよ、勝手に器械持ち出して！

原田さん 先生、ピザいかが？

先生 (胸が悪くなり) どうしてそんなものが……。

奥さん ちよつと！ どうしてこんなに散らかってるの！

原田さん いろいろあったんですよ。

先生 ……なんだか焦げくさいな。(奥をのぞき) アーッ！

奥さん なあに？ (奥をのぞき) アーッ！

原田さん 先生、この器械いいわねえ。あつたかくって。冬になったら毎日これや
つてちようだいよ。ねえ、ちよつと先生つてば。

原田さんの声など耳に入らず呆然とする二人。
激しい雨の音。

暗転。

2 おろおろ 二つ目の部屋「事務室」

雨の音。

加工食品を扱う小さな卸業の会社「金田商事」の事務室。

暗い顔をした五人の男性社員、島、内藤、野坂、林、松田。

島 ……よく降るな……。

松田 今日は一日中この調子かい？

内藤 (手帳を見ながら) 天気予報によると、夕方には西から回復するそうです。

日本海側はおおむね晴れですが太平洋側の一部……

野坂 もういいよ。

内藤 ところによつては一時、雷雨になるかも。

野坂 いっそ台風でも来てくれれば飛行機も飛ばないだろうに。

林 社長、もう空港に着きましたかねえ。

松田 着いたら電話が来るだろう。

野坂 電話なんかされても困るんだよな。

林 スペイン人と仕事の話なんか出来ませかね。あの社長が。

島 それが出来れば通訳のできる新人なんて雇うわけないだろ。

松田 その岩下君だよ。肝心な日に来ないなんて。

島 安川から連絡は？

林 ありません。

内藤 (メモする) 連絡なし、と。

松田 事故にでも遭ってないといいけど。

島 あいつ、ほんとにスペイン語ペラペラなのか？

林 ペラペラ喋られても僕たちにはわかりませんからね。

野坂 面接したの、松田さんでしょ？

松田 本人がそう言うんだからそうだろう？

内藤 でも松田さんが岩下君推した理由、すごかったじゃないですか。

林 え？ なになに？

内藤 (手帳をめくり) 「昔、飼ってた犬に似てるから。」

島 ちよつと、松田さん！

松田 あれは嘘をついてる目じゃないと思うけどねえ。

野坂 そういうやり方はさ、娘の婿選ぶ時とかにしてよ。

電話が鳴る。

島 (出て) お茶受けからご進物まで、おいしさをお届けする金田商事で……ああ、

社長。どうですか、そっちは。……え？ 鼻が高くてまつ毛が濃い？ (内藤、傍

らでメモをとる) いいんですよ！ スペイン人の第一印象なんて！ 岩下、来て

ませんよ。どうしますか？……は？ 彫が深くてまぶたがないみたいって……、

しつかりしてくださいよ社長！ 社長！

野坂 俺なんでこんな会社入っちゃったのかな。

島 (受話器を置き) 完全にパニック状態だ。

内藤 やっぱり来ちゃうのか……。彫の深いスペイン人。

松田 岩下君さえいればなあ。

野坂 安川さん、どこ探してるんだろう。

林 どうします？ 島さん。

島 俺たちでなんとかするしかないだろう。

野坂 とりあえず挨拶ぐらいできないとまずいよね。

島 おい内藤。スペイン語の本あったろ？

内藤 (本を渡し) これですね。

島 (ページを開き) じゃあ読み上げるから。みんなであとに続いてくれ。まずは

……エンカンタード！

松田・林・野坂 エンカンタード！

内藤 (メモを取っているのでやや遅れ) エンカンタード！

島 これが「はじめまして」って意味だ。次はアディオス！

松田・林・野坂 アディオス！

内藤 (メモを取っているのでやや遅れ) アディオス！

林 「さよなら」って意味ですよね？

野坂 お、詳しいねえ林君。

島 野坂、チャチャいれるなよ。

内藤 (メモ) 「さよなら」っと……。

松田 でもせっつかくはるばるスペインから来てくれ人に、「はじめまして」のあとに

きなり「さよなら」って言うのはどうかなあ。

島 そういう順番で書いてあるの！

野坂 もっとビジネスっぽい会話はないの？

島 (ページをめくり) ビジネスっぽいねえ……。

林 「注文を変更したいんだけど」とか。

島 ……あった。キエロ……カン……ビアル……エル……ペデイド。

松田 なに？

島 キエロ、カンビアル、エル……ペデイド。

内藤 (メモを取りながら) もう一回言ってください。

島 キエロ、カンビアル、エル、ペデイド。

内藤 (メモを取りながら) キエロ、カンビ……もう一回言ってください。

島 キエロ、カンビアル、エル、ペデイド！

内藤 （メモを取りながら）カンビアル、エル……。すみません、もう一回。

島 （本を押しつけ）自分で書き写せ！

野坂 絶対覚えられないな。

松田 もう「はじめまして」も忘れちゃったよ。

林 エンカスタードですよ。

内藤 （メモを見ながら）違う違う。エニカニタード。

島 エンカンタードだろ？

内藤 （メモを見ながら）ああ。これ「ニ」じゃなくて「ン」か……。

野坂 もうメモ取るのやめたら？ 内藤ちゃん。

島 ダメだな。時間の無駄だ。

林 英語にしましょう。スペイン人だつて少しは話せるでしょ。

野坂 スペイン人が話せてもこつちがわからないんじゃないよな。

松田 確か社長が「らくらく英会話」って本、持ってたよ。

内藤 トイレでよく読んでましたよね。

島 英語ぐらい少しは話せるヤツいないのかよ。

野坂 かりんとうとかせんべい卸してる会社で英語話せなきゃいけないとは思わなかったんで。

林 （本を持ってきて）ありました！

内藤 著者は誰？

島 関係ないだろ、そんなこと。

林 『らくらくトラベル英会話』でしたよ。

松田 （手に取り）なにか使えるところがあるだろう。……これ、いいじゃないか。「ちよつとしたひと言」。

内藤 たとえば？

松田 「日本にいらしたことはありますか？」

野坂 もうそこまで来てるって。

松田 「この近くに安くておいしいレストランはありますか？」

内藤 （手帳をめくり）ありますよ。三丁目に「ひまわり亭」って洋食屋が……

島 答えるな！（松田から本を奪いとり）どこ見てんですか松田さん。仕事なんですからこういうのですよ。「ちよつと考えさせてください」。

林 なんて言うんです？

島 アイル シンク アバウト イット。

他四人 （島の後に続いて）アイル シンク アバウト イット。

島 アイル シンク アバウト イット。

他四人 （島の後に続いて）アイル シンク アバウト イット。

松田 それがなんだって？

内藤 「ちよつと考えさせてください」。

松田 なんだ、内藤君も覚えてないのか。

島 そういう意味なんですよ！「ちよつと考えさせてください」って。

松田 ああ、そうなのか。

島 次、いきますよ？「素材はなんですか？」。ワット イズ メイド オブ。

他四人 ワット イズ メイド オブ。

島 ワット イズ メイド オブ。

他四人 ワット イズ メイド オブ。

島 （大げさなアクションをつけている野坂に）野坂！ 身ぶりはいいよ！ 次！

ハウ メニー デイズ ウィル イット トゥー リーチ ジャパン。これが、

「日本まで何日かかりますか？」

松田 「日本まで何日かかりますか？」

島 日本語の方覚えてどうするんですか！（ふと林を見て）寝るな！ 林！

林 （びっくりして目を覚まし）あ……すいません。

野坂 （オーバーなアクションで林をのぞきこみ）リアリー？

林 英語の授業って反射的に寝ちゃうんですよ。

島 英語って言い出したのおまえだぞ！

そこへ安川登場。

安川 遅くなりました！

島 遅いよ！

松田 岩下君は？

安川 いませんでした。

島 いませんでしたですむか！

野坂 今までどこ行ってたんですか？

安川 岩下君の家だよ。お母さんとお姉さんがいて、お茶をごちそうになってたんです。

内藤 岩下君には、お姉さんがいる、と。(メモ)

松田 で？ 岩下君、どこ行ったって？

安川 さあ。いつもの時間に家を出たそうです。いいご家族なんですよ。すっかり話はずんじゃって。

島 (安川につかみかかり) この一刻を争う時に、お茶飲んだただと？

安川 すみません。おいしいパイナップルがあるからっておっしゃるので、つい……。

内藤 安川さんはフルーツ好き。(メモ)

島 今まで俺たちが……というか俺がどれだけ苦労したと思ってるんだ！

松田 まあまあ島君。

林 落ち着いてください。

島 うるさい！ おまえ、さっきまで寝てたくせに！

松田 ムリに会話なんてすることないじゃないか。ひとまずおいしい日本料理でも食べてもらおうよ。

野坂 接待費でパーツとね。

内藤 でも山本さんいないから金庫開きませんよ。

安川 山本さん、どうしたんです？

林 なにか家の事情で遅れるそうです。

島 ここは商社会社なんだからさ、こういう大事な日にはみんなちゃんと会社に来ようよ！

内藤 そんなこと言われても、ここにいるのはちゃんと来てる人たちですからね。

松田 どうしてこんなことになっちゃったのかねえ。

野坂 大体うちみたいになっちゃい会社が海外と取引しようなんてのがそもそも間違いなんだよ。

安川 もとはと言えばアレでしょ？ 社長の奥さんがフラメンコ始めたせいだよ？

林 僕もさんざん聞かされましたよ。「これからの時代はスペインだ」とか、「あなたたちには大地を踏み鳴らすような熱い情熱が足りない」とか。

野坂 情熱だけで取引先決められてもなあ。

松田 奥さんも言い出したら聞かない人だからねえ。

安川 社長も社長ですよ。いくら奥さんに頭が上がらないからって、僕たちになんの相談もなくいきなりスペイン人呼びつけるんだから。

島 あてにならない通訳なんか雇うより、他にすることがいくらでもあるはずなんだよ。

内藤 自業自得ですよね。

野坂 やっぱり悪いのは社長だな。

安川 そうですよ。

林 僕たちはよくやっているとします。

島 ほんとだよな。

松田 それにしても岩下君、どうしちゃったんだろう。

野坂 もういいじゃないですか。来ないヤツなんてほっとけば。

島 子どもじゃあるまいしな。

内藤 このまま岩下君が来なかったら、彼のお給料、今回の特別手当として僕たちで貰いましょうよ。

野坂 たまにはいいこと言うね、内藤ちゃん。

島 そういうのをメモしておけよ。

安川 慰労会を開きませんか？ 僕、いい店みつけたんです。

松田 どこだい？

安川 ちよつと遠いんですけどね、おでんが絶品なんですよ。

野坂 いいねえ。

内藤 僕、地図持ってますよ。

林 慰労会もいいですけど、こっち向かってるんですよね、スペイン人。

間。

島 ……現実に戻ろう……。

安川 すみません……僕、余計なことを……。

松田 いいんだよ安川君。おでん、楽しみだ。

野坂 こんなことなら一杯ひっかけてくればよかったなあ。

島 要するにだ。敵は商品を売り込みに来る。いわばこっちはお客様なんだから、言葉なんかわからなかったって堂々としてればいいんだよ。

林 いいように丸めこまれたりしないといいですけど。

内藤 そうだ！ おとしロシア人と取引しようとして失敗した時のメモがどこかにあるはずですよ。

野坂 あったな、そんなことも。

内藤 (段ボール箱をあさり出し) なにかの参考になるかも。

内藤が大きな段ボール箱を開けると、中から岩下が顔を出す。
間。

島 ……いくわくしくたあく！

岩下、再び段ボール箱の中に隠れる。

島 出て来い！ この野郎！（岩下を引きずり出す）

岩下 ごめんなさい！ ごめんなさい！

松田 よしなさい、おびえてるじゃないか。

野坂 甘いですよ松田さんは。

松田 だって今のなんてポチを拾った時にそっくりだったよ。

林 いつからそこにいたの？

岩下 朝からずっと……。

安川 お母さんに来てないって言っちゃったよ。

内藤 ロシアのことが書いてあるメモ、見なかった？

島 なんで隠れてた！

岩下 急に怖くなっちゃって……。

林 やっぱり話せないの？ スペイン語。

岩下 ……すみません……。どうしても就職したくて……。

松田 そうか……。しかたないよ。ポチも言葉は得意じゃなかった。

野坂 もうポチのことは忘れてくださいよ。

島 どうするんだよ。来るんだぞ！ スペイン人！

岩下 (必死に) 外国語が出来るのは嘘じゃないんです！ 姉がタヒチに嫁いだの

で、タヒチ語なら少し話せるんです！

島 なにに？

松田 タヒチ語ってどんななんだい？

岩下 「アイタ ペアペア」とか。

野坂 ああ、南国ってかんじだな。

林 意味は？

岩下 「ノー プロブレム」ってことです。

内藤 (メモを取り) 「ノー プロブレム」ね……。

島 こっちはプロブレムだらけなんだよ！

岩下 「どういたしまして」って時にも使います。

内藤 (メモを取りながら) へーえ。

島 (内藤のメモを取り上げ) 来るのはタヒチ人じゃない、スペイン人だ！

野坂 俺たちの方が話せるんじゃないの？ 「はじめまして」はエンカンタードって

言うんだぜ？

岩下 でもたいていの挨拶は「オラ！」って言うだけですむみたいですよ。

松田 なんだ、少しはいけるんじゃないか。

岩下 スペイン語教室に通ってるんです。

林 他にはなにか話せる？

岩下 ノ アブロ エスパニョール。

松田 やるねえ。

内藤 どういう意味？

岩下 「スペイン語が話せません」。

安川 矛盾したこと教えるんだね。

島 教室も会社も辞めてタヒチで暮らせ！

そこへ山本登場。

山本 すみません、遅くなっちゃって。

松田 やつと来たか、山本さん。

山本 いや思ったより時間かかっちゃって。(辺りを見回し)よかった、お客さんまだ？

野坂 いっそ休んだ方がよかったかもしれないよ。

林 お宅でなにかあったんですか？

山本 それがね、親父が昨日、整骨医院でボヤ出しちゃってさ。

安川 煙草かなんかですか？

山本 お湯を沸かしたらしいんだけどさ。

林 整骨医院で？

山本 私も何度聞いてもよくわからないんだ。

内藤 被害状況は？

山本 診察室がちよつと焦げた程度だったんだけどね。とにかく女房とお詫びに行つて来たんだよ。いやまったくなにをしでかしてくれるんだか。

島 しでかしてくれるヤツならここにもいますよ。

山本 (岩下に) 今日の主役だな。頼りにしてるよ。

岩下 ごめんなさい……。

山本 リラックスリラックス。舌の運動でもしといたら？ (やってみせる) レロレ
ロレロ……。

岩下 ノ アブロ エスパニョール……。

山本 なんだ、大丈夫じゃない。

野坂 (大きな身ぶりで) ワタシ、スペイン語、話セマセーン！

山本 ……。今、そう言ったのか？

林 そうです。

山本 ……スペイン語で？

安川 矛盾してますよね。

山本 でも話せたじゃないか。

林 あれだけだそうです。

松田 タヒチ語なら得意だそうですよ。

山本 そんなもの話せたってしかたないだろう？

島 よかった……。山本さんはわかってくれるんですね。

山本 それで？ お客さんは？

島 社長とこっちに向かっています。

野坂 すごく彫が深いそうですよ。

山本 どうするんだよ。

内藤 ですからね、アレ知りませんか、山本さん。ロシア人との取引に失敗した時のメモ。それを参考に対策を……

山本 失敗した時のことを参考にしたってしようがないじゃないか。

島 (抱きつかんばかり) 本当によく来てくれましたよ、山本さん！

松田 やっぱり今日のところは日本料理でも食べてもらおうよ。わざわざ遠くから来てくれた外人さんには、いい印象を持ってもらいたいじゃないか。

林 食事しながらだったら、なんとか場がもちますしね。

安川 おでん食べないかな。

林 もうちよつと高級感があつた方がよくありませんか？

島 懐石料理なら「恵比寿屋」か。

内藤 （手帳を見ながら）あそこだと一人二万円ですね。

野坂 うわあ、だるま食堂の定食一カ月食えるよ。

島 （山本に）金、あるんですか？

山本 （金庫に向かい）全員はムリだろう。今月の支払い残ってるし。

野坂 ジャンケンだな。

安川 くじ引きにしましょう。

島 接待なんだから営業が行くに決まってるだろ。

山本 （金庫をのぞき）あーっ！

松田 どうした？

山本 ……お金がない……。

一同、「えーっ！」と驚きの声。

松田 ないってどういうこと？

山本 三十万、この封筒に入れておいたのに……。

安川 泥棒？

林 警察に……！

島 ちよつと待てよ！（山本に）最後に確認したのは？

山本 昨日まではあつたよ。封筒はね。

野坂 中身、確認してないの？

山本 してなかったな……。

安川 それじゃいつ盗まれたかわからないんですね。

島 しっかりしてくださいよ！

内藤 社長の奥さんにバレたらクビですね。

山本 どうしよう……。

野坂 ほんとに三十万入ってたんですか？

山本 確かだよ！ そうだ！ あの時、岩下君もいたよな？

岩下、泣き崩れる。

松田 どうしたんだ。

岩下 (泣きながら) ごめんなさい！

林 まさか……。

安川 ……まさかねえ。

島 岩下、おまえ……。

岩下 使っちゃいましたあ。(おいおい泣く)

野坂 いい加減にしようよ、岩下君。

山本 なにに使ったんだ、そんな大金！

岩下 スペイン語教室の入会金と授業料に……。

内藤 そんなにお金かかるんだ。

岩下 短期集中の特別コースは高かったんですう。

島 ふざけんやつ！

岩下 だって僕が喋れなかったらみなさん困ると思つて……。

島 だつてもなにもおまえ喋れないじゃないか！

安川 「スペイン語が話せません」てこと以外はね。

林 結局僕たちも困つてるし。

野坂 金がなくなった分、ピンチ度アップ！

内藤 (手帳に)「恵比寿屋」の線はなし……。

山本 どうしてくれるんだよ！

野坂 山本さんの管理にも問題あったんじゃないですか？

山本 冗談じゃないよ！ 私が経理になってから金庫の金が盗まれたことなんて一

度だつて……

林 (岩下に) どうやって金庫のカギ開けたの？

岩下 フタが開いてたんです……。全開に……。

島 山本さん！

山本 ……急に社長に呼ばれたんだよ……。

野坂 今まで運が良かっただけじゃないですか。

内藤 (手帳に) 山本さん、強運の持ち主……。

山本 開いてればとっていいの？ フタが開いてたら他人の弁当でも食べていいの？ ちがうだろう！

松田 まあ、彼も悪気があったわけじゃないし……。

島 責任とってくださいよ松田さん！ 俺たちが欲しかったのはスペイン語が達人人間で、コソ泥みみたいな真似する犬じゃないんですよ！

松田 これだけのことをするんだ。ある意味、大物だと思うよ。

野坂 なくなったものはしょうがないよ。もう泣くな、ポチ。

山本 しょうがないよ。給料から天引きだからね。

林 山本さんも減俸かもしれないね。

島 ……俺は前から思ってたんだよ、どうしてこの会社は、みんな思いつきで仕事をするんだ？ もっとマニュアルとか戦略とかさ、危機管理とかあるだろう、普通は！

安川 社長は夫婦の危機を回避するので手いっぱいですからね。

山本 経費節約の会議ならマメにやってるだろう。あれだって立派な危機管理だよ。

安川 慰安旅行先もちゃんと会議で決めますよね。

内藤 熱海で二泊したいところを箱根一泊に抑えたり。

山本 その分、ビンゴ大会を開いたんだよ。

松田 それも立派な戦略だな。

島 肝心の仕事は行き当たりばったりじゃないか！

林 でもそれがいいところなんじゃないですか？ 各自がよかれと思ったことをやる自由な社風が。

内藤 ウチの社訓は「明日は明日の風が吹く」ですからね。

島 それがおかしいっていうんだよ！

野坂 いっそ「あとは野となれ山となれ」に変えたら？

電話が鳴る。

岩下 電話だ……。 (出ようとする)

島 (制して) いい！ おまえもうなんにもするな！

松田 (電話に出て) はい、お茶受けからご進物までおいしさを……。ああ、社長。

……はい。(みんなに) 今、駅に着いたって。

島 (代わって) いいですか社長。タクシーなんか乗らずに、すぐ空港まで引き返してスペイン行きチケットを買うんです。それでスペイン人を強制送還してください。取引は中止です。どうしても言うなら社長一人で商談を進めてください！

山本 島君！ (受話器を奪って) なんでもありませんよ。はい。……はい、わかりました。(切る)

島 ……どうして止めるんですか。

山本 飛行機のチケット買うお金なんてないよ。

島 俺はもう知りませんよ。

安川 そうヤケにならないで……。

島 やめちゃおうかな、こんな会社……。

岩下 今、就職するの、ほんとうに大変ですよ。

島 俺に似た犬を飼ってる人事担当の人を探すよ。

林 懐石料理が無理ならせめて蕎麦でもとりましょうよ。日本料理には変わらないでしょう？ 村野庵、何番でしたっけ？

野坂 あそこ、もうないよ。

林 そうなんですか？

内藤 宅配ピザに変わっちゃったんですね。

松田 ピザじゃなあ。あちらの方が本場に近いだろう。

野坂 だるま食堂でいいよ。あそこ早いしさ。

松田 そうだな。普段の私たちを見てもらえばいいよな。

林 スペイン人は別に僕らの暮らしぶりを見に来るわけじゃないとは思いますが。

山本 だけどオレンジジュースを売りに来るんだろ？ 日本人の食生活を勉強する

のは大事だと思うよ。

安川 バレンシアオレンジなら生で食べたいところだけだな。

内藤 安川さん、フルーツに目がないから。

林 みんな昼定食でいいですか？

野坂 いいだろ。時間ないし。

岩下 僕、鍋焼きうどんが……。

間。

安川 ……またよりによって時間のかかりそうなものを……。

岩下 やっぱいいです。みなさんと一緒に。

島 あたり前だ！

野坂 自分の置かれた状況も顧みず、鍋焼き食う気であるところを俺は買うね。

岩下 すみません……。昨日からちよつと食べたかったもので……。

松田 やっぱり君は大物になるよ。

林 じゃあ注文しますね。

内藤 ちよつと待ってください！ 今日、金曜日ですよ……。

山本 休みか！ だるま！

安川 万事休すですね……。

絶望に満ちた間。

やがて松田がすつくと立ち上がり、強い足取りで動き出す。

野坂 どこ行くんですか？

松田 倉庫だよ。かりんとうとせんべいを取ってくる。

山本 商品じゃないか。

松田 背に腹はかえられないよ。とにかく私は、できるだけのおもてなしをしたいんだ。(退場)

安川 ……あんなに毅然とした松田さん、初めて見ました……。

野坂 なにしてるんだよ、岩下！ 手伝ってこい！

岩下 はい！（追う）

山本 私たちもなにか出来ることを探そうか。

野坂 探すって言っても、ねえ？ 島さん。

島 知らないよ、俺は。

安川 機嫌なおしてくださいよ。

林 社長の奥さんがいればなあ。フラメンコでも踊ってもらうのに。

山本 またお出かけ？

内藤 (手帳を見て) 今日はお料理教室ですね。

安川 内藤君、むかし踊り習ってたって言わなかった？

内藤 僕のは日舞ですから。

野坂 この際なんだっていいよ。

岩下と松田が戻ってくる。

岩下 (フラメンコのドレスを手に) こんなものを見つけたんですけど。

山本 奥さんのだな。

野坂 ちようどいいや。ほらほら内藤ちゃん！（とドレスを着せる）

松田 (お菓子を器にあけ) スペイン人のお口に合うかなあ。

山本 (ドレスの裾をつまんで) こんなにヒラヒラが……。一体いくらするんだろ
う……。

安川 クルッと回ったりしたらキレイなんでしょうね。

岩下 (ドレスを着た内藤に) とってもお似合いです！

野坂 ほら、踊って踊って！

内藤、優雅にしずしずと踊る。一人、岩下だけが拍手。

安川 クルツと回らなきや！

山本 迫力ないなあ。

林 情熱の国の人は納得しないでしょうね。

内藤 やっぱりムリですよ。(脱ぐ)

安川 僕、着てみてもいいですか？

林 安川さん、踊れるんですか？

安川 (着ながら) 幼稚園の頃、バレエ習ってて。

野坂 タイツ履いてたんだ。

林 人に歴史ありですね。

安川 ……ダメだ……。入らない。

野坂 衣装はいいから、ちよつと踊って！

安川 アン・ドウ・トロワ、アン・ドウ・トロワ……。 (踊る)

山本 ……「見るに堪えない」とはこのことだな。

野坂 (再び内藤にドレスを着せ) やっぱり内藤ちゃんだって。

内藤 (着ながら) そうだ。社長の奥さんからフラメンコについて聞いたメモがあ

りますよ。

野坂 それを早く言ってよ。

林 (内藤の手帳を開き) これかな？「奥さん、フラメンコ教室初日」。

山本 おお、なんだって？

林 (読む) 「アンダルシア地方で発祥したスペインの舞踏……」。

安川 ……。それだけ？

林 初日ですからね……。

野坂 もう内藤ちゃん、メモ禁止！

内藤 踊り方もちよつと教わりましたよ。確か、手をこんなふう……。(踊る)

山本 それじゃ盆踊りだろう？

松田 なあ岩下君。この盛り付け、どう思う？

岩下 彩りが地味ですね。

松田 全部茶色だからなあ……。もっとカラフルなものがあったかねえ。(倉庫へ)

安川 岩下君、踊れない？ フラメンコ。

岩下 タヒチアン・ダンスなら少々……。

内藤 (踊り) だから腕がこうで……見えませんか？

野坂 見えるよ。どしようにすくいに。

島 ……脱げ……。

内藤 え……？

島 いいから俺に貸せ！

林 島さん！

島 見てられないんだよ！

山本 それでこそ島君だよ！

ドレスを身につけ、力強く情熱的に踊る島。

それを盛り上げようと手拍子を叩く山本。

野坂 山本さん、それドドンパですよ。

内藤 (茶托を取り出し) こっちの方が感じ出るんじゃないですか？ (と、カस्ता

ネットのように打ち鳴らす)

林 僕、歌います！

林、伴奏代わりに歌い出すが、その歌声は力強いフラメンコ調から、だんだ

ん清らかな讚美歌一五八番へ。

島 調子狂うじゃないか！

林 すみません。僕むかし、聖歌隊にいたもので。

山本 続けて続けて！ 最初はよかったよ。

野坂 (安川に) そうだ、闘牛やろう、闘牛!

安川 島さんに負けてられないからな!

岩下 僕、パレオ持ってます!

野坂 なんだ? それ。

岩下 (赤いパレオを取り出し) 義理の兄からもらったんです。タヒチでは洋服代わりに使えますけど、なにかと便利なんですよ。

野坂 (早速パレオを振り回し) いいねえ。ほら、安川さん、牛やって!

安川 (やる気満々で猛々しく) モオッッ!

野坂 オーレッ!

岩下 僕、牛の角つくります!

安川 頼んだよ!

岩下 (戻って来た松田に) この段ボール、使ってもいいですか?

松田 いいものがあつたよ、岩下君! ほら、紅シヨウガ!

岩下 いいじゃないですか! アクセントになりますよ!

松田 だろう?

フラメンコ組、闘牛組、松田、岩下がそれぞれ夢中になっているところへド
アチャイム。

社長の声 (緊張のあまり裏返って) 「お連れしたよ!」

稲光。雷の音。激しい雨の音。

一瞬、我に返る社員たち。

暗転。

「え〜っ！」という不平を訴える女性たちの大きな声。
パイプオルガンの音。

明るくなったそこは、教会の隣にある町民会館の調理室。

エプロン姿の八人の女性たち。大きな袋を提げた沢木、金田、芥川、松平、森、岡野、安藤、そしておなかの大きなリサ。

金田 来ないってどういうことよ！

沢木 農家から戻る途中の道が、土砂崩れでふさがれちゃったんだってさ。

安藤 (リサに) 昨日の雨、すごかったもんね。

リサ スコールみたいだった。

金田 それで先生、なんて？

沢木 「あとはよろしく」って言うのよ。

金田 なによそれ！

岡野 昨日の打合せどおりにやればいいってことじゃない？

芥川 私、覚えてないわ……。松平さん、わかる？

松平 昨日はほら、バーゲンに行こうって話してたじゃない。

森 あんまり無責任じゃありませんか？ 私たち、まだ「芽キャベツのバター煮」

と「若鶏のグラタン」しか習っていないのに。

金田 どうせなら「平目のムース」とか「鳩のパイ包み焼き」とか、いかにもフランス料理！ってのを教えてほしいわよね。

森 そういうことじゃなくて……。

沢木 あの先生、もとからちよっと調子いいよね。あたしたちに仕事手伝わせておいてさ、(物まねで)「みなさんにはとーってもお勉強になると思いますよ？」。

岡野 似てる似てる！

沢木 (物まねで)「できましたらハーブはフレッシュなものをご用意くださいあい」。

岡野 そっくりそっくり！

リサ (安藤に) 似てるんだ？

安藤 かなりいい線いってる。

芥川 (松平に) お化粧、濃いのよね。

松平 五十三歳って言うてるけど、実は六十代なんだって！

安藤 えー、うちのお母さんより年とってる。

芥川 安藤さんのお母様、お若いのね。

金田 あたしも小耳にはさんだんだけど、提携農家に有機野菜作らせてるとかいうのも、ほんとに親戚の農家に分けてもらってるんだって！

沢木 見栄っ張りだからね。

森 ちよつと待っててください。先生が来ないということは、食材も届かないということですよね？

芥川 やだ、信じられない。

松平 えー、どうするの？

沢木 (袋を持ち上げて見せて) だからうちからあるだけ持ってきたよ。

金田 さすが沢木さんね！

沢木 おかげで冷蔵庫ガラランガラ。(袋を置く)

芥川 私たちだけでパーティー料理なんて作れるのかしら……。

岡野 (外をのぞき) そろそろ始まるころじゃない？

リサ (安藤に) 誰の結婚式なの？

安藤 先生の知り合いみたい。

岡野 (外に向かつて) 犬之介、おりこうにしててね。

沢木 岡野さん、また犬連れてきてるの？

安藤 えー、犬？ (のぞく)

リサ (のぞいて) かわいいー。

芥川 (のぞいて) 大きいわねえ。噛まない？

岡野 噛まないよねえ？ 犬之介。

金田 ヘンな名前ね。あたしならカルロスってつけるわ。

松平 あたしだったら、シヤネルかエルメス。

森 (一人、材料をチェックしていたが) 時間ないんですよ！

金田 そうそう。ほら、岡野さん、犬は後回し!

森 今、先生のレシピア見てたんですけど、これ、なんて書いてあるんですか?

沢木 (見て) 日本語で書けばいいのに、気取っちゃってさ。

岡野 フランス語だよ。

森 それぐらいはわかるんですけど。私にも。

金田 それ以外はわかんないわよ。あたしたちには。

森 でもみなさん、昨日、打合せしたんでしょ?

松平 森さん、いなかった?

森 平日は会社がありますから。

芥川 どうせ先生が作ると思って、あんまり真剣に聞いてなかったのよね。

安藤 あたし、ちよつとだけならノート取りました。

金田 結婚を間近に控えた人は、やっぱり気合が違うわね。

森 見せてください。(見て) オールドゥーヴルヴァリエ……サラダウドウ

クラーブ アマ ファソン……。

沢木 そう言えばサラダのこと、「サラダドウ」とか言ってたわ。

森 (ノートをめくり) あの……それで作り方は?

安藤 そこにはメニューの読み方しか書いてませんよ。

森 あまり意味がなくありませんか?

安藤 そう思つて途中でやめちゃったんですよ。

リサ オードヴルの盛り合わせと、カニのサラダでしょ?

松平 あら、安藤さんのお友だち、フランス語が出来るの?

芥川 頼もしい人が飛び入りで来てくれたわね。

安藤 実家でゴロゴロしてたから連れて来ちゃったんです。

リサ (おなかをさすり) 産まれるまではヒマでヒマで。

森 それじゃえーっと……(リサに) すみません、お名前を、

リサ リサです。

森 (名刺を出し) 私、森と申します。よろしく。それではリサさん、早速ですけど、これは?(とノートを見せる)

リサ (読んで) 牡蠣のグラタン・シャンパン風味と仔牛のカツレツ、えー、これなんだろう。ランデブー ドゥ フリュイ ドゥ メール……。海の幸のランデブーかな？

森 なんですか？ 海の幸のランデブーって。

リサ 海の幸が……こつそり浜辺でデートしながら「ジュ・テーム」とか……。

沢木 言っとくけど、牡蠣もシャンパンも仔牛もランデブーもないよ。

岡野 なに持ってきた？ 沢木さん。

沢木 キヤベツでしょ、じゃがいもでしょ、豚肉にひき肉に卵に……とにかく珍しいものなんてないわよ。

森 メニューを考え直すしかありませんね。

岡野 それぞれ得意料理を作ろう！

松平 あーあ。こんなことならママも連れてくればよかった。

芥川 松平さんのお母さん、お料理上手だものね。

松平 最近みちるのお弁当もまかせつきりなの。

芥川 ラクしてるのねえ。うちの子なんてこの頃「もうシャケ弁はイヤ！」なんて言うのよ。

沢木 これからもっと生意気言うよ。

芥川 いやだわ……。

森 メニューを考えましょう！

安藤 あたし、ロールキャベツ作りまーす。手伝ってね、リサ。

リサ OK。

金田 手の込んだもの作るわね。ご主人になる方、幸せだわ。

沢木 初めはみんなそうじゃない。あたしだって昔は餃子を皮から作ったり、いろいろやったよ。

芥川 子どもが産まれるまでですよええ。

沢木 亭主なんてなに食べさせたって、おいしいともまずいとも言わないし。

松平 うち結構言いますよ？

芥川 気を遣ってるのよ。松平さんのところ、婿養子だから。

森 決めるんです！ メニューを！

松平 あたし、ポテトサラダにする。この間、雑誌に出てたの。ワインビネガー使
うのよ。オシャレでしょ？

沢木 だからそんな小洒落たものないって。

森 私は野菜のクリームスープを作ります。

芥川 結婚式なのよね。あんまりみっともないもの出せないし……。

岡野 あたしはニンジンのステーキ。

金田 ……今「ニンジンのステーキ」って言った？

岡野 はい。

リサ どんな料理？

岡野 ニンジンを強火で焼いて、肉汁が出てきたら……

安藤 肉汁って、ニンジンの？

沢木 ……金田さん、岡野さんについて野菜の付け合わせ作ってくれる？

芥川 私、なにをしたら……。

沢木 それじゃ、一緒にポークソテー作ってよ。

芥川 生のお肉触るの、気持ち悪いわ……。

沢木 何年主婦やってんのよ。

松平 芥川さん、サラダ手伝って。

それぞれ作業にとりかかる。

金田 (岡野に) まったく突拍子もないこと言い出すわね。

岡野 お料理のこと考えるの好きなんですよ。

金田 料理が好きって手つきじゃないじゃない。あーあー、そんなに厚く切っちゃ
ダメよ。ちよっと練習しなさい。

芥川 デザートがないんじゃない？

リサ あたし、差し入れにパイナップル持ってきました。

松平 あらあ、リサさん大活躍ね。

森 みなさん、口だけじゃなく手も動かしてくださいよ。

沢木 森さんて、ほんとしつかりしてるよね。会社でもさぞ仕事ができるんでしょ
うね。

森 なかなか認めてはもらえませんか。いまだにお茶は女子社員が淹れるものと思っ
ている上司も多いですし。

松平 大変ねえ。あたし就職したことないからわからないけど。

芥川 主婦だつて結構大変よ。主人は協力してくれないし。

岡野 こんなもんでどうですか？

金田 つながっちゃってるじゃない。千切りつていうのはこうやるのよ。(鮮やかな
包丁さばきを見せる)

松平 でも芥川さんのところはお舅しゅうとさんがよく手伝ってくれるじゃない。

芥川 洗濯物取り込んでくれるくらいなもの。

安藤 あれ？ ねえリサ、キャベツ知らない？

リサ 知らないよ？ アンちゃん、茹でてたんじゃないの？

岡野 キャベツ、ここだよ。

森 ……なにやってるんですか、金田さん。

安藤 ロールキャベツ作るんですけど……。

金田 そうか……。そうだったわよね。

松平 あらまあ、きれいに切れてるわ。

沢木 キャベツ、一個しか持ってきてないよ。

金田 ごめんなさい。あたしつたら調子に乗っちゃって。

森 どうするんですか、こんな千切りの山作って！

沢木 しかたないね。ポークソテーはやめてトンカツにしましょ。

芥川 キャベツの千切りが付け合わせだったらそうなりますよね。

安藤 ロールキャベツの中身、どうしましょうか。

松平 肉だんごにして森さんのスープに入れさせてもらえばいいじゃない。

森 ダメです！ 第一、そんなことしたらメニューが減るじゃないですか！

芥川 でも残りものでやりくりするのが主婦の務めでしょ？

森 私たちが作っているのはお給料日前の晩御飯じゃないんですよ？ 結婚パーティーに出すお料理なんですよ？ 代役とはいえ、大きな仕事をひとつまかされてるんじゃないですか。責任を持ってベストを尽くすべきです！

松平 トンカツにキャベツの千切りはベストな組み合わせじゃなあい？

森 私が言ってるのは……

芥川 肉だんごを入れたら野菜スープじゃなくなっちゃうからイヤなのよね？

森 違います！

沢木 女っていうのはね、森さん。嫁とか妻とか母親とか、いろいろな役をこなさなきゃなんないの。堅苦しく考えてばかりじゃ、しんどくってかなわないよ。

森 だって、ただでさえこの非常時に……。

金田 うちも小さいながら商事会社を経営してる立場だから、森さんの言うことはよくわかるわ。でも仕事にトラブルはつきもの！ みんなで力を合わせて乗り切っていきましょう！

森 そう思うなら千切りなんてしないでください。

金田 だから悪かったって言ってるじゃないの。

一方、楽しいな岡野、安藤、リサ。

安藤 ほら、肉だんごのお星様。

リサ わあ、カワイイー！

岡野 見て！ 肉だんごのハート！

リサ わあ、生々しいー。

沢木 ちょっと、岡野さんから目離しちゃダメよ！

金田 ほらほら、食べ物で遊ばない！

森 もう一度メニューの確認をしましょう。トンカツにポテトサラダに野菜のクリムスープに……。

松平 ねえ、沢木さん。この漬物、おいしい！ どの？

沢木 実家で漬けて送ってくんのよ。

金田 じゃあそれもつけてクリームスープをお味噌汁にしたら？ トンカツ定食って感じでカツコつくじゃない。

芥川 カツコはつくかもしれないけど……子どものお誕生会だってもう少し華やかなもの作るわ、私。

金田 そんなこと言うなら、あなたアイデア出してちょうだいよ。

芥川 私、そんなつもりで言ったんじゃない……。

沢木 もめないもめない！ ほら、トンカツ作るよ！

松平 揚げ物って、服に匂いがつくのよね。

芥川 ころも衣つける時、手がベタベタするし。

沢木 ああそう！ もういい、そっちでキレイなおべべが汚れないように、サラッドウでも作ってな！

岡野 あーあ、怒っちゃった。

金田 手伝うわよ、沢木さん。

沢木 もとはと言えば、金田さんの千切りなんだよ？

金田 それを言わないでよ！

安藤 イライラにはカルシウム！ 牛乳でも飲んでください。(と、沢木に牛乳を渡す)

沢木 さつき子どもに怒鳴ってきたばっかりなのに。(と、紙パックから一気に飲み干す)

森 ああ！

岡野 もう出来たの？

森 クリームスープの仕上げには牛乳が……。

沢木 ……飲んじやったよ。

安藤 ごめんなさい……。

森 私のクリームスープが……。

金田 (森の肩を力強く叩き) ……野菜スープ！ 森さんが作ろうとしてたのは、最初からただの野菜スープよ！

芥川 うらやましいわ……。金田さんて前向きで。

松平 森さん、あんな暗示にかかるかしら？

芥川 かかるんじゃない？ かなり弱ってるもの。

沢木 ごめんね森さん。でもかえってよかった。あの牛乳、少し味が変わったもの。

森 ……古い牛乳を持って来たんですか？

沢木 今日ぐらいはもつかと思っただけ。

金田 おながこわれないうちにトンカツ揚げちゃいませよ！

全員、それぞれの持ち場につく。

リサ パイナップル切っておこうかな。

芥川 そんな力仕事して大丈夫？

リサ タヒチのパイナップルは柔らかいんです。芯も食べられますから。

安藤 リサのご主人、タヒチの人なんですよ。

松平 ねーえ、タヒチの人ってフランス語で話すの？

森 フランス領ですからね。

リサ 彼が話すのはタヒチ語だけだね。

安藤 リサのことはね、もうナイスカップル！って感じなんですよ。あたしもリサたちみたいな夫婦になりたいなあ。なんでも話し合って、お互い支え合って、

結婚しても恋人同士みたいに仲良く暮らすの。

岡野 安藤さんのお相手もタヒチの人？

安藤 ううん。日本のサラリーマン。

芥川 それじゃあんまり期待は出来ないわね……。

森 決めつけるのは失礼だと思います。

沢木 そりゃそうだけど、サラリーマンの家庭なんてどこも似たようなもんなんじゃないの？ 亭主は帰ってきたら、ごはん食べてお風呂入って寝るだけ。家事と

子育ては奥さんにまかせつきり。

芥川 お姑あしとさんとのゴタゴタなんかにも無関心だし。

松平 芥川さんとこ、仲良しじゃない。

芥川 お義父さまとはね。それはそれでお義母さまは面白くないのよ……。

松平 ウチは実家だけど、親が倒れでもしたら、ダンナはきちんと介護なんかしてくれそうにないわ。

安藤 そんなふうにならないように話し合ってくださいよ。

金田 そうは言ってもね、お金のことなんかになると、穏やかに話し合ってもいられないのよ。

森 これからの夫婦はもっと違ってくると思います。仕事をもつ女性も圧倒的に増えていきますし。

松平 でもやつぱり子どものことは女の方に責任がかかってくるわよねえ。

リサ あたり前でしょう。産むのはお母さんなんだから。

沢木 その大変さが男どもにはわかんないのよ。

芥川 家族を養うために苦労してるんだ、とか言うんですよ。

岡野 そういう人を選ばなきゃいいよね。

安藤 そうですよ。

金田 とにかく頼りない男が多いわね、ウチの社員なんか見ると、情熱が足りないっていかしらのかしら、ほんとにお給料払っていいのかなって思う時があるわよ。

安藤 頼りなくても優しい人ならいいな。

沢木 結婚すると変わるでしょ。ま、お互い様だけど。

森 結婚のかたちは、もっと多様化するはずですよ。

岡野 だったらあたし、犬と結婚したい。

安藤 リサの弟、犬に似てるわよ。岡野さんのタイプかも。

岡野 あたしが好きなのは本物の犬だもん。リサさんの弟って人間でしょ？

リサ 一応ね。

森 望みをかなえるためには努力が必要なんです。

芥川 努力したって、結局損するのは女なのよね……。

松平 そうよねえ。

森 あなたたちがどんな損してるっていうんですか！ 親に甘えて、夫が無関心なのをいいことに、のほほんと習い事して！ あなたたちのような甘ったれた主婦

がいるから、女性の地位がいつまでたっても向上しないんですよ！ 男社会で必死に働いているのに、がんばっても、ちよつとミスしても「これだから女は」って言われるこつちの身にもなつてください！

松平 会社で認められないのをあたしたちのせいになされてもねえ。

芥川 世の中がそうなつてゐるんだからしょうがないわよねえ……。

森 そうやつてなあなあでやつてるから世の中が変わらないんです！

金田 森さん、落ち着いて！

沢木 結婚前の人の夢をこわして悪かつたわ。

安藤 ほら森さん。スープ、煮立つてる。

リサ あのね、日本人は男も女も仕事を抱え過ぎですよ。みんなかわいそう。私の弟も仕事が見つからなくて悩んでたと思つたら、今度は仕事のことでもノイローゼ気味になつてるもの。

金田 ノイローゼになるほど仕事に熱意のある子ならウチに欲しいわ。

リサ でも仕事は楽しく生きるためにしなくちゃ。

森 そうは言つても仕事というのは……！

リサ ほら森さん、(自分の眉間をさし)ここにすごいシワ。タヒチではね、なんでももつと気楽に考えますよ？ たいていのことは「アイタ ペアペア」って言うてすませちゃう。

安藤 それ、どういう意味？

リサ 「ノー プロブレム」

沢木 タヒチ辺りじゃそうかもしれないね。

松平 タヒチかあ。黒真珠が安いよね。

芥川 青い海と青い空でしょう？ 交通事故やお受験の心配もなくいいわねえ……。

リサ 環境より気持ちですよ。人を押しのけようなんて考えない。

岡野 そうそう。おいしいものごととか考えてればいいの。

リサ せかせかせかないのが一番。

森 すみません……。私、興奮してちよつと言ひ過ぎました。

芥川 いいのよ。気にしないで。

松平 もうなにを言われたかも忘れちゃったわ。

森 向上心を持つこと。それだけは忘れないでください。

金田 トンカツ揚がったわよ！

芥川 ベテラン組は手早いわねえ。

沢木 どこに置いとく？

森 こちらへ！ 早速盛り付けてしましましょう！（運ぶ）

沢木 熱いから、気をつけて！

森 あっ！

うっかり手をすべらせる森。散らばるトンカツ。

岡野と安藤、急いでトンカツを拾い集める。

森 私……なんてことを……。

岡野 大丈夫じゃない？ すぐ拾ったし。

安藤 言わなきゃわからないですよね。

リサ 一瞬のことだもの。「アイタ ペアペア」よ。

松平 イヤだ、絶対ダメよ！

芥川 床に落ちたんですよ？ 捨てましょう！

岡野 もつたいないなあ……。

森 すみません！ 始末書を書かせてください！

金田 よしてよ。ウチの会社で毎日読み飽きてるわ。

沢木 ……衣をはいでフライパンで焼くってのはどう？

安藤 ポークソテーに戻るんですね！

リサ グッドアイデア！

松平 そのままよりはいいかしらね。

芥川 衣はぐ時、手がベタベタになりませんか？

沢木 芥川さん、普段、手え使って料理してないの？

森 すみません、みなさん。私のせいで。

金田 お互い様！ 沢木さんだって牛乳飲んじやったんだし。

沢木 キャベツのこと忘れてない？ 金田さん。

安藤 あれ？ トンカツは？

岡野 (外に向かつて) おいしい？ よかったね、犬之介。

芥川 岡野さん……まさか……。

森 (外を覗いて崩れ落ち) 食べてます……。

金田 犬にあげちゃったの？

岡野 だって、捨てましようって。

松平 まだ話は終わってなかったのよ？

沢木 だから岡野さんから目を離すなって言ったのに……。

安藤 でも犬之介、うれしそう。

リサ せめてもの救いね。

沢木 (深いため息) さて、どうする……。

芥川 逃げちゃいましようか……。

森 私の責任です！ 今すぐ犬之介を連れて事情をお話ししに……！

沢木 料理がさんざんな上に結婚式までぶち壊しちゃ悪いよ。

金田 (材料の袋の覗き) 長ネギとしらたきとお豆腐があるわ。いつそ寄せ鍋にし

ましよう！

安藤 大勢だし、それがいいですね。

岡野 肉だんごもあるし。

松平 お鍋ってラクなのよねえ。

芥川 材料切って入れるだけですものね。

金田 いいわね？ 森さん。

森 教会でお鍋を囲む結婚パーティー……。聞いたことありませんけど、この際、

仕方ありません。

沢木 そうと決まればとつととやっちゃいましょう！

岡野 (材料の袋から取り出し) これ作りたい！

安藤 (見て) 白玉粉?

松平 ヤダ、お鍋に入れる気?

金田 いいじゃない、すいとんがわりに。かさが増える分には大歓迎よ。

安藤 ほとんど闇鍋ですね。

沢木 岡野さんはもう好きなこととしていいから。

岡野 よーし、やるぞー。耳たぶの固さだね。芥川さん、耳、触らせて?

芥川 (ひるんで) どうして私なの?

森 自分の耳でもいいんじゃないですか?

岡野 そうか……。 (作業にかかりながら) 森さんはさ、なんでお料理教室に来ようと思ったの?

森 私、海外と取引するような大きな仕事が見たいんです。その時に、ホームパーティーを開いて外国の方と交流を持てたらいいなと思って。

リサ 大きな夢への下準備ね。

金田 頼もしいわねえ、あなた、ウチの会社に来ない? 今度外国と取引始めるんだけど、社員が情けないのばかりで。

安藤 外国ってどこですか?

金田 スペインなのよ。あたしフラメンコ習っててね。いつかは本場に行って踊るのが夢なの。

松平 素敵ねえ。

金田 いいでしょう? 情熱の国よ。血が騒ぐわよ。

芥川 それでどうしてフランス料理習いに来てるんですか?

金田 案内見た時スペイン料理だと思ってとっさに申しこんじゃってね。ほら、フランスもスペインもカタカナ四文字じゃない?

沢木 せっかちにもほどがない?

金田 先生には内緒ね。

芥川 内緒と言えよ……実は私、いつか自分のお店を持ちたいんです……。子ども頃から、ケーキ屋さんになるのが夢で。

森 資金はあるんですか?

芥川 コツコツ貯めてはいるの。義理の父も少しは援助してくれそうだし。
松平 お舅さん、あなたには甘いから。

沢木 お舅さんは甘くても、現実はそのなりに甘くないよ。

松平 あたしはね、子どもをアイドル歌手にするのが夢なの。

岡野 歌、上手なんだ。

松平 上手じゃないけど一日中歌ってるのよ。好きなんだと思うわ、歌うのが。

芥川 アイドル歌手はいいけど、みっちゃんこの間の健康診断で「肥満児」って言われてなかった？

松平 ママが甘やかしてるからねえ。乳歯も全部虫歯だし。

金田 太ってるならオペラ歌手にしたらいいじゃない。

松平 やっぱりアイドル歌手ですよ。がんばります、あたし。

沢木 あなたががんばってもねえ。

安藤 私はやっぱりかわいいお嫁さんになりたいな。森さんには笑われるかもしれないけど。

森 笑いませんよ。私だって別に結婚しないって決めたわけじゃないんですから。

金田 (身を乗り出し) ね、ほんとにウチの会社に来ない？ 独身のボンクラどももゴロゴロいるわよ？

森 結婚のことは考えますけど、ボンクラと一緒にするのは嫌です。

岡野 沢木さんの夢は？

沢木 あたしい？ まあ、いいじゃないの。

安藤 教えてくださいよ。

沢木 あたしの夢なんてささやかなもんよ。

芥川 そこまで言って黙ってるなんて。

松平 そうですよ。

沢木 ……麻雀をね……。

森 は？

岡野 麻雀？

沢木 そう。一度でいいから好きなかだけ麻雀を打ちたいのよね。

森 それぐらいすぐにかないそうな気がしますけど……。

沢木 そう思うでしょ？ それがなかなか。まず他に三人面子めんつがいるし、第一そんな時間作れないって。

安藤 時間でどれくらいかかるんですか？

沢木 半チャンで一時間強ってどこ？ だけど好きなだけっていったらね。それでオーラスを緑一色リユースーで上がりたいのよ。

金田 そうなるとささやかじゃなくなってくるわね。

岡野 野望ですよね。

リサ そういう岡野さんは？

岡野 あたしはお料理の先生になりたい。

岡野を除く全員 うそっ！

岡野 ? どうして？

金田 あなたそれ、野望っていうより無謀ね。

沢木 いいんじゃない？ 夢をみるのは自由なんだから。

岡野 なりますよ、あたしは。

森 期待してます。

金田 みんな結構いろいろ考えてんのね。

松平 聞いてみるものねえ。

安藤 リサは？

リサ あたしは、いいお母さんになる。

金田 なるるわよ！ あなたなら！

森 ……なにを根拠にそうおっしゃるんですか？

松平 「お母さん」には簡単になれるわよね、子どもさえ産めば。

芥川 そこからが大変なのよね。少しも目が離せないでしょう？ それでもケガはするし、熱は出すし。

沢木 大きくなったらなったで、ちっとも言うこときかないしね。

松平 お金もかかるしねえ。

岡野 やっぱり犬の方がいいな。

安藤 でも、そんな苦勞、忘れちゃうって言いますよね？

沢木 忘れやしないけどさ。どうでもいいのよ、そんなこと。

金田 そ！ 元気でさえいてくれればね。

沢木 たとえあたしが死んだ後にだって、子どもが死ぬことなんて考えたくないね。
亭主は全然かまわないけどさ。

松平 あたしなんて、みちるが運動会で走ってるの見ただけで涙が出ちゃうの。ウチの子、太ってるからかけっこなんてビリなのよ？ でも一生懸命走るのよ。(エプロンで目を押さえ) あ、ダメ……。思い出ただけで泣けてくるわ。

森 そんなに打ち込めるんですか。

芥川 こればかりは産んでみないとねえ。

リサ 楽しみだな。

金田 さて、そろそろ完成？

松平 ポテトサラダ、出来ました。

安藤 お鍋の方もあとは煮込むだけです。

リサ パイナップルもOK。

岡野 白玉は今、丸めてます。ニンジンステーキはもう焼けてます。

森 岡野さん……。いつの間に……。

芥川 これでなんとかなったのかしら……。

岡野 あ、讚美歌歌ってる。

隣の教会から列席者による讚美歌 (一五八番)

リサ これ、「よろこびの歌」？

金田 「第九」じゃない？

安藤 讚美歌にも入ってるんですよ。

芥川 年末でもないのに。

安藤 本人たちの希望で選べるんです。

沢木 さすが、もうじき花嫁さんになる人はお詳しいこと。

松平 安藤さんも教会で？

安藤 そのつもりなんですけど。

金田 あなた、打ち掛けも似合いそうじゃない。

安藤 おばあちゃんもそう言うんですよね。

芥川 今が一番楽しい時ね。

沢木 またそういう余計なこと言わないの。

リサ 大丈夫。結婚したって楽しいよ。

安藤 うん。

リサ 「アイタ ペアペア」よ。

岡野 お料理はどこに頼むの？

安藤 レストランにお願いする予定。

沢木 それがいいって。

岡野 森さんが結婚する頃には、あたしお教室開くから。

沢木 森さん、今すぐ結婚した方がいいよ。

森 ……大変です！

金田 そうよ、メインがニンジンのステーキになっちゃうわよ。

森 どうしよう……。

松平 どうしたの？

森 最も大事なことを忘れてました。

岡野 なあに？

森 ……ウエディング・ケーキ……。

松平 やだ、そうじゃない！

安藤 そうだ、「クロカンブッシュ」作るって、先生言ってた……。

金田 そんなこと言ってた？

安藤 言っていましたよ。小さなシュークリームを積み上げて作るから、人手がたく

さんいるんだって。

芥川 そう言えば、昨日はその段取りを打合せたのよね……。

森 本末転倒じゃないですか！

金田 どうする？

沢木 どうするものにも、もう時間も材料もないよ。

岡野 ……これだ！

安藤 これだ！って……白玉？

岡野 シュークリームの代わりに積み上げるの！

金田 いいじゃない！ 純白の花嫁さんにピッタリよ。

芥川 金田さんて、とことんプラス思考ですよね……。

森 なにもないよりは……いいんでしょか……。

リサ やりましょう！

松平 あとは茹でるだけね？

沢木 名誉挽回だね、岡野さん。

讃美歌の歌声に合わせ、全員が流れ作業で白玉を茹で始める。

リサ 岡野さん、これなあに？

岡野 犬の形にしてみました。

沢木 いいのよ、普通に丸めれば！

安藤 溺れてる溺れてる。

岡野 がんばれ！ そこで犬かきだ！

森 遊んでる場合じゃありませんよ！

金田 時間ないわよ！ 浮いてきたのからどんどんあげて！

松平 こっちで盛り付けますね！

芥川 こんなお皿でいいのかしら……。

沢木 絶対落つことさないでよ、森さん！

森 お願いします！

金田 カッコよく盛り付けてよ？ ガウデイの大聖堂みたいにドーンとね！

芥川 ドーンとねって言われても……。

松平 ツルツルツルツルすべるのよね。

安藤 讚美歌、終わりそうですよ！

沢木 ほらほら、ラストスパート！

芥川 ああ、どうしてこういつも時間がないのかしら！

松平 子どもたちやおじいちゃんたちの時間を分けてもらいたいわ！

讚美歌が終わった頃、白玉の山が完成。

外では拍手とお祝いの歓声。

沢木 ……どう見ても月見団子だけ。

金田 気持ちの問題よ。

安藤 お年寄りがいないといいですね。

松平 お餅とちがうから喉越しはいいわよ。

森 (完成した品々を見て) 本当にこれを並べるんですか。

芥川 どのどなたか知らないけど、お気の毒だわ……。

金田 苦難を乗り越えてこそ、夫婦の絆は深まるのよ！

沢木 この世の中、そうそう思い通りにはいかないよ。ウチの息子なんて、せっかく大学行かせてやったのに、ミュージシャンになるって金髪にして、鼻に三つも

ピアス空けてきたのよ？

岡野 これ、ケーキカットするのかなあ。

森 ……やっぱりやめませんか？

金田 今さら弱気になっちゃダメよ！

森 思いとどまるのが結果的にいいことだってあります。

松平 せっかくこんなになんばったのに？

森 お客様は完成した品物にお金を出すんです。作った人の苦勞を買うわけじゃないんです！

芥川 でも、私たちボランティアだし……。

安藤 どうしたの？ リサ。

リサ ……(苦しげに)おなか痛い……。

安藤 ええっ！

金田 やだ、陣痛？

芥川 やっぱりパイナップルなんて切るから……。

沢木 予定日はいつなの！

リサ 十五日……。

松平 過ぎてるじゃない！

安藤 早く言つてよ！

芥川 お料理教室なんて来てる場合じゃないのに。

リサ 動いてた方が早く出て来るかと思つて……。

芥川 だけど、今出て来られても……。

岡野 お湯、沸かすね！

森 (仰天して) ちよつと待つてください！ ここで産ませるんですか？

沢木 産ませる気はなくても、産まれちゃうつてことはあるからね。

安藤 タオルもいりますよね！

森 えーっ！ えーっ！ ここでえ？

松平 呼吸を整えて！ ヒツヒツフーよ！

芥川 それじゃ産まれちゃうじゃない。

松平 そうか。

金田 ラクにして！ かんじゃダメよ！

森 救急車を呼んだ方が……。

芥川 乗せてくれないんじゃない？

沢木 お産は病気じゃないからね。

森 それじゃ車を……！

安藤 ちよつと岡野さん！ それ白玉茹でたお湯でしよ！

リサ ……治まった。

一同、安堵のため息。

安藤 びっくりした……。大丈夫？

リサ うん、痛くない。

芥川 早く病院に行った方がいいわよ。

岡野 ほんとはパイナップルの食べ過ぎだったりして。

沢木 陣痛に決まってるんじゃない。予定日過ぎてんのよ？

リサ でも昨日、確かにパイナップル二つ食べました。

松平 ふた切れじゃなくて？

リサ ええ、二つ。

森 出産を控えた妊婦の自覚に欠けるんじゃないですか？

金田 いざなってみれば、森さんもきつところよ。

森 そうでしょうか……。

安藤 今のうちに運んじやいましょう。

松平 そうね。

芥川 お鍋、気をつけてね！

金田 キャベツこぼれてるわよ、岡野さん！

沢木 (手伝おうとするリサに) あなたはいいってば！

岡野 もうすぐ帰れるよ、犬之介。

八人の女性たち、一列になってあたふたと料理の皿を運んでゆく。
全員が退場したところで

リサの声 「やっぱり痛いかも……」

「えっつ！」という七人の大きな声。

暗転。

やがて遠くから赤ん坊の泣き声。

4 すくすく 四つ目の部屋「乳児室」

ピンポーンというドアチャイムの音。

男の声 「すくすく乳児園さーん。お届け物です」

保母の声 「はい。あら、ヨツちゃん。ついてきちやダメよ」

ドアの開く音。

男の声 「ハンコお願いします」

保母の声 「はい」

ドアの閉まる音。

続いて「ガチャン」と鍵の閉まる音。

保母の声 「え？ やだ、ウソ！（ガチャガチャとドアを開けようとする音）やだ、
どうして！」

ドアノブを回すガチャガチャいう音。

ドアを叩く音。

薄闇の中、モゾモゾと動き回るたくさんの人影。

「バブバブ」と呪文をつぶやいているかのようなざわめき。

やがてそのざわめきが、打ち寄せる波のように、次第に大きくはつきりと

「ウルサイ」

「ウルサイ」

「ウルサイウルサイ」

男の声 「鍵、かかっちゃったんですか？」

保母の声 「どうしよう……中には赤ちゃんしかいないんです！」
男の声 「大変だ、すぐ管理人室へ！」

二人のあわてて去っていく足音。
間。

「……シ・ズ・カ……」

「……シズカ……」

「シズカダ……」

「……シズカニナッタ」

ゆっくりと明るくなったそこは、マンションの一室にある小さな託児施設。
十四人の赤ん坊がゴロゴロ転がっている。

そこへ二人の赤ん坊、年長1と年中1が、這い這いしながら戻ってくる。

年長1 新入りのヤツ、危うく外に出るところだったよ。

年中2 夢中でおもちやをしやぶっていたくせに、よく気がついたな。

年中4 それにしても騒がしかったぞ、なんだ？

年長1 わからん。こいつを止めようとドアにつかまったら、ガチャンと音がして、あの騒ぎだ。

年長2 つかまり立ちに成功か？

年長1 まあな。

年中6 (興奮して) すごいぞ！

年長4 世界が広がって見えただろう？

年長1 ほんの一瞬のことだったが、確かに違った景色を見たよ。しかし、まだ不安の方が大きい。

年長5 (豪快に笑いながら) すぐ慣れるさ。そして今度は私のように、立ち上がった後、足を一步踏み出せるようになる。

年中5 私はおっぱいを飲んだ後、確実にげっぷを出す方法を習得したよ。

年少1 さすが月齢六カ月ともなると違うな。

年少3 ちよつと見てくれ！ 寝返りが打てそうなんだ！

年長4 なんだったって！

息を飲んで仲間が見守る中、年少3が、もどかしく動きながらもゴロンと寝返りを打つ。

年中6 (興奮して) 初めてにしては見事じゃないか！

年長6 体のキレもよかったぞ。

年少2 (弱々しく) 君は運がいい。私の初寝返りは、深夜、孤独な檻の中でだったよ……。

年少3 緊張したよ。まだ体がほてっている。

年長5 親にみせてやれ。(年長1に) 君もな。初めて立って見せた時の騒ぎようといったらないぞ。私が見せたのは、実は三度目のそれだったが。

年長7 (暗く) しかしそんな騒ぎも最初のうちだけだ……。親たちは、我々が自由であることを次第に好ましくないと思い始める。

年中5 まさか。

年長2 残念ながら事実だ。

年少1 どんな時にだ？ 今後のためにも具体的に教えてほしい。

年長2 そうだな、例えば……、すまない。まだ思い出すという作業に慣れていないんだ。

年長3 私から話そう。買物に出かけた時などがいい例だ。抱っこされずに自分の足で歩かなければならないが、親のそばから離れることは許されない。

年少2 なんて逆説的な……。

年長6 親たちは本当に我々の成長を望んでいるのかと疑いたくなる時がある。私は日々、机の上のコップを倒すなど、自分の能力を確かめる仕事に尽力しているが、あまり熱心になると手をピシヤリとやられたりするんだ。

年中4 私がいかに力強いかをアピールしようと客人の衣服のボタンをむしり取った時など、母親は……

年中6 歓喜の声をあげていたらろう？

年中5 たっぷり誉められたか？

年中4 誉められるどころか、すぐにボタンを奪われた揚げ句、客人の前で叱られるという屈辱を受けたんだぞ、ちくしょうっ。

年少1 ミルクを浴びるように飲んだというのは、その夜なんだな。

年中3 (鼻で笑って) 君もまだ人間が出来ていないな。

年長4 (カチンときて) なんだと？

年中2 よせよ。新入りがびっくりしてるぞ。

年長1 (年中1に) 思ったことはどんどん言った方がいいぞ。ただでさえ我々は、意思の伝達において圧倒的に不利なんだ。

年少2 私たち出来ることと言えば、眠ることと泣くことぐらいだ……。

年少3 吸いつくことだって出来る！

年長5 この動作を是非覚えておくといい。こうやって頭を縦に動かすんだ。「イエス」という意思表示になる。

年中6 たったそれだけで？

年中5 手足を使ったり、泣いたりする必要はないのか？

年中2 そいつは便利だな。

何人ががうなずきの練習を始める。

年長5 こうか？

年長6 勢いが無いな。強い意思が感じられない。

年中1 これ、どう？

年長5 お、なかなかコツをつかんでいるよ。

年中4 私のフォームも確認してくれ。

年長3 その程度ではなにかが喉につまっていると誤解されて、逆さに振られる恐

れがあるぞ。

年長4 首がすわっていなかった頃の事を思い出すんだ！ ガクンとなつたろう。

あの感じた。

年長2 (ガクンとうなだれた年中2に) それだよ！ ……なんだ、眠ってしまったのか。

年長1 (激しくうなずきながら) こうか、こうだな！

年少1 飲み込みが早いな。

年中5 君はミルクを飲むスピードも抜きん出ているからな。

年長3 食事について言えることは、あらゆることについて言えるんだ。

年中3 (必死に練習を続ける年中6に) 興奮しすぎだ。また吐くぞ。

年長4 焦ることはない。我々には自由な時間がたっぷりあるんだ。

年少1 確かに時間はたっぷりあるが、それを自由に使える体を我々はまだ持っていない。

年長6 それを勝ち取るための時間じゃないか。

年少2 と言うことは、その体を得た時に時間の方はなくなっているのか？

年少3 弱気なことを。

年長7 最近、気になることがあるんだ……。私はもうすぐ一歳と二カ月になるが、自力で空間移動できるようになった半面、以前ほど背が伸びなくなっている……。

年中4 二足歩行の悪影響か？

年長2 (よちよち歩いてきたがドスンと尻もちをつき) 脅かさなくてくれ。

年長4 もうよそう。(年中1の肩を抱き) 同志の増えた記念すべき日だぞ。

年長5 景気のいい話はないのか？

年長2 あの話をしてくれよ。指を使って世界が広がったという例のヤツを。

年中5 何度聞いても希望が湧いてくるあれか！

年長1 なんのことだ？

年少1 君ははしかで休んでいたな。

年中6 (興奮して) 指だよ、指！

年少3 (年長3に) いつ眠気が襲ってくるかわからん。始めてくれ。

年長3を取り囲み、息をのむ赤ん坊たち。

年長3 ……あきらかに届かない場所に、とても興味深いものがあった。私は母親に抱かれながら、それに強い注意を向けていた。そのことを母親にも知ってもらいかけたが、なにしろ大変な距離があったからね。その時、自然にすつと腕が伸び、この一本の指が、ピーンとその対象物を指したのだ。そのあと、信じられないことに、母親はそれに気づいたんだ。「お月さまよ」とかなんとか、よくわからないが、その名前らしきものをささやいていた。あんなに遠いのに。この指がそれを可能にしたんだ。

感嘆とため息。

年少2 (自分の手を見つめて) 一本で足りるのか？

年長5 むしろ一本だけの方が効果的なんだ。

年中5 この指が！

年中1 指……。

うっとりとなめるように自分の指を見つめる赤ん坊たち。

実際にしゃぶり出す者も。

年長4 環境の中から、努力と工夫をもって引き出した快樂というのは、腹が満たされることの次に素晴らしいな。

年長1 まったくだ。日常から逸脱した受動的な快樂とはわけが違う。

年中6 行楽のことだろう？ しかしその時は文句のつけようがないじゃないか。

よだれのことなど忘れるほど興奮するぞ。

年中3 いたずらに興奮するだけだろう。実際私は、遊園地とかいうところに出かけた翌日から三日間、高熱に苦しめられたよ。

年長7 私も出掛けるのは気がすすまない……。長時間乗り物に揺られた上に、オムツ交換のタイミングが合わず、尻がかぶれた……。

年長6 ああいうのは時々でいいんだ。でなければ体がもたん。

年長5 外出先ではしばしば撮影のために目線を強要されるだろう。私の愛くるしさに夢中になる気持ちはわかるが、首が疲れてかなわないよ。

年中4 こっちの苦労も知らずに、いい気なもんさ。

年少2 先日もよりよって入浴時にパチリとやられたよ。

年中3 まさに赤裸々な記録を残してなにが面白いのやら。

年長7 大体、我々にプライバシーなどないのだ。

年長1 見つめられながらの入浴や公衆の面前でのオムツ交換を自分たちも体験してみるといい。

年長6 オムツ交換と言えば、常々疑問に思っていたが、君たちには足の間になにか突起物がついているだろう。あれはなんだ？

年少1 それこそオムツ交換の途中や、手持ちぶさたな時などには便利なものだよ。

年長5 無茶をするなど止めたくなるほど激しく引っ張っている時があるだろう。

年中5 痛みはないのか？

年中3 自ら痛みを強いるわけがない。

年中6 想像を絶するな。

年長1 そう言えば君たちにはついていないな。うらやましがるう。

年少3 なにを馬鹿な！

年中3 素直にうらやましがればいいものを。

年長5 うらやましいものか。我々にはその代わり、後ろにも前にも尻がある。

年中3 尻なんてひとつあれば充分だ。

年中4 尻に比べて著しく美観を損ねるそんなものをぶら下げていて、なにがうれしい。

年長2 君たちは知らなかるうが、これには形も動きも様々なバリエーションがあるんだ。ぶら下がっているばかりではない。

年長1 聞き流せ。持たざる者のひがみだ。

年長6 おのれ……（憤慨し）美しき二つの尻を持つ者たちよ、集まれ！

その言葉をきっかけに、「私はついている方だ」「あんなもの邪魔なだけだ」
「すまんがちよっと手をひいてくれ」などと口々に言いながら、男児と女児
が二手に別れる。

年少1 （年中2に）寝ている場合じゃないぞ。

年中4 （悔しげに）新入りはあっちか。

男児、九人。女児、七人。

年長6、男児の群れの年長7に歩み寄る。

年長6 なにをしている。君はこっちだ。

年長7 でも、私には突起物が……。

年長6 場所が違うだろう。君のそれは「ヘソ」だ。

二人の女児、女性たちの群れへ。

同数の八対八。

年長5 これでわかったろう。確率は二分の一だ。

年少3 たまたまそんなものを持ち得たからといって、あまり思い上がらない方が
身のためだぞ。

年中5 第一、我々が最も必要とし、敬愛する母親たちは、誰ひとりとしてそんな
ものをつけていない。

年少2 母親を持ち出されてはお手上げだ。

年長2 言い過ぎたよ。そう怒らんでくれ。

年長4 我々も少しムキになり過ぎたな。

年長6 さっきの君たちの態度が一瞬、父親が時折見せる横暴さとダブって見えた

んだ。すまなかった。

年中1 父親に関しては私も言いたいことある。

年中1に集まる視線。

年長1 やつと調子が出てきたな。

年長4 いいぞ。なんでも言ってみたまえ。

年中1 我が家は私も含めて三人とも昼間は家を留守にしている。つまり、条件はみな同じなのに、なぜか父親は帰宅すると、母親に百パーセントのサービスを要求するんだ。当然、私に供給されるべきサービスは削減されることになる。もちろん、私は父親を愛している。「高い高い」などは母親のそれと比較にならないほどダイナミックだし、日々の鍛錬に細かな指導などせず、大らかに見守ってくれるのも父親だ。しかし母親のサービスについては、親でありながら最大のライバルであるもの父親なんだ！

年少1 言うじゃないか。

年中6 君、見直したよ！

年中1 (照れて) 少し喋り過ぎた。歯茎がかゆい。失礼して指をしゃぶらせてもらうよ。

年長2 遠慮など無用だ。たんとしやぶるがいい。

年中3 父親か……。気の毒な点もあるにはあるがな。的はずれな親切をしては、感謝されないことに驚いて傷ついているという愚かさも目立つ。

年長6 そんな物わकारいのいいことばかり言っていては、いつまでたっても生活は向上されないぞ。

年少2 我が家の場合、ライバルは「お姉ちゃん」と呼ばれている小さな人間なんだ。

年中4 うちの「お兄ちゃん」だ。かつては母親を独り占めしたであろうに、この期に及んでなにを、と思えてならないよ。

年長1 あの不衛生極まりない手で体中を触ってくる危険性に、大人たちは鈍感過

ぎる。

年中2 なにより忙し過ぎるんだ。

年中5 特に母親はな。

年長7 一体、なにをあんなに動き回る必要があるのだろう……。ずっと私のそばにいてくれればいいものを、立って、歩き回って、しゃがんで運んでと、見ていて目が回る。

年長4 目を休めるなら、しわくちなやな人々がいいぞ。ほとんど「テレビ」とかいう箱の前から動かないからな。

年少1 「おじいちゃん」や「おばあちゃん」と呼ばれている人物たちだな。

年長5 あの静かな人々を有効に利用できないか？

年長3 確かに我々の要求に最も寛容な派閥であることは間違いない。時間に余裕があることや、ゆっくりとした動き、やわらかい食べ物を好むなど、我々との共通点も多い。しかしそれだけに頼り切っていいものかどうか、不安な面が多いのも事実だ。

年中3 中には手ごわいタイプもいるしな。

年長6 いずれにしても頼ってばかりではダメだ。

年長4 やはり我々はより積極的に訴えるべき時期に来ているんだ。

年長1 立ち上がろう！

年少3 もう半年待つてくれ！

年長2 まずは待遇の向上をうたって座り込みというのはどうだ？

年中3 「いい子にしてておりこうさん」などと喜ばれるのが関の山だろう。

年中4 それじゃあ一体どうすればいいんだ！

年長3 もう一度整理してみよう。我々が望むものとはなんだ？

年少1 ミルクだ。

年少2 おっぱい。

年中2 心地よい眠り……（寝てしまう）

年中5 ……清潔な下着……。

年長1 強い体！

年長7 ……突起物。

年中4 叫びたい！

年中6 歩きたい。

年中1 靴を履く。

年長2 ほじるのが好きだ……。

年中3 注射は嫌いだ。

年長4 虫に触りたい。

年長5 土を食べたい。

年長6 とにかく上へ行きたい。とりあえず二階だ。

年少3 吸いつきたい！

年少2 おっぱい……。

年少1 さつき言ったら？

年長2 整理されたのか？

年長1 それがなんなんだ？

年長3 ……なんだったかなあ……。

年中4 しっかりしてくれよ！

年長3 すまない。少し腹が減って頭が朦朧もろろとしてきた。

年中1 つまり、こういうことかい？「努力と工夫をもって引き出した快樂は、腹

が満たされることの次に素晴らしい」。

年長6 ……そうか！

年長3 そう！ それだよ。

年中6 （興奮して）なんなんだ、もったいぶるな！

年長4 不満を訴え、人から与えられるよりも、

年長5 自分の努力で勝ち得た方が喜びは大きいということだ。

年長3 我々の望みは、時間さえかければ、

年長1 自分の力で手に出来るものが多い！

年少3 幸い、時間はたっぷりあるんだ！

年少2 しかし、おっぱいは今欲しい。

年中3 あまりおっぱいのことばかり言うな。こっちまで腹が減ってくる。
年長2 うっ！（おなかを押さえて縮こまる）

年長4 どうした！

年長2 （苦しげに）腹の中が絞られるようだ……。

年長3 空腹が頂点に達したんだ……。

年長7 実は私も……（泣きだす）

年少2 （嗚咽をこらえながら）やめてくれ、つられるじゃないか。

年少1 しつかりしろ！

年中6 （やはり泣き始めた年中5に）君はたっぷり飲んだばかりだろう。

年中5 下半身が不快なんだ……濡れているだけならまだしも……。

年長1 飲み過ぎには注意しろとあれほど……。

年少3 （むずかりながら）たまらなく眠い……。

年中3 （泣きながら）おとなしく寝ればいいだろう！

年中2 （泣きながら体を起こし）気持ちよく眠っていたのに……。

それぞれの声につられて泣き出す者続出。

外からはお母さんたちの声。

母1の声 「イヤだ、みんな泣いてるじゃないの」

母2の声 「（ドアを叩き）ヨッちゃん、ママよー！」

母1の声 「鍵が開かないなんて信じられない」

母2の声 「体験入園の日にこんな目にあうなんて……」

年中4 （泣きながら）これよりつらいことがこの先も待っているんだろうか。

年長6 （泣きながら）恐ろくな。

年長5 （泣きながら）しかし、それ以上に楽しいことも、我々を待っているはず

だ。

年中1 （泣きながら）なんて厄介な世界なんだ！

年中3 (泣きながら) まったくだ。

年長4 (泣きながら) それでもこの世界には、

年長3 (泣きながら) 見るべきものが多すぎる。

年長2 (泣きながら) 面白いことが多すぎる。

年中2 (泣きながら) 時間はあるんだ。

年少3 (泣きながら) 時間なら、たっぷりあるんだ。

全員の泣き声は次第に和音になり、やがて合唱になっていく。

この世に生まれて また去る日まで

ことあるたびごと 繰り返される

かなしくおかしい どんちゃん騒ぎ

恐ることなし いざ立ちゆかん

年中1 いい歌だな。

年長6 力が湧くだろう！

年長1 ほんの一瞬、空腹も忘れるほどだ。

年中5 (顔をゆがめたまま) ……空腹だけならな……。

年長3 よく覚えておくといい。

年長4 明日もみんなで歌うぞ。

年長6 さあ、もう一度！

イバラの道には おろおろ迷い

嵐にあらあら 巻かれようとも

懲りずにいきいき 明日を夢見て

すくすく育たん 時のまにまに

ゆつくりとハミングしながら歌の余韻を味わう赤ん坊たちを残し、辺りが少

しずつ暗くなる。

保母の声 「(息を切らし) お待たせしました！」

母1の声 「どうしてこんなことに」

保母の声 「本当に申し訳ございません(ガチャガチャと鍵を開ける)」

年中4 (外の音を聞き) ウルサイ。

年長5 お迎え？

年少2 おっばい？

母2の声 「私、やっぱりやめます。こんなところにヨッちゃんを預けるわけには

いきませんから」

年中1 ママだ！

年長2 いいなあ、おっばいだ。

全員が口々に「おっばい、おっばい」「ママー」「眠ーい」と騒ぎだす。

年中1 (ドアに向かって這い這いしながら) ママ、ママ。

年中2 ……もう寝る……。 (年中1に) あした また明日。

年中1 (振り向いて) 明日！

それぞれが、泣きながら、見悶えしながら、足踏みしながらも口々に

「明日」「また明日」と、力強く這い這いしていく年中1を見送る。

幕。